

「愛してますよ（笑）、  
タルソンさま！」 「イ  
アソンだ！」

イアメディはいいぞ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「あまり調子に乗らないでくださいね、タルソンさま♡」

「誰がタルソンだ。オレはイアス——あ、なんでもないですごめんなさい」

これは、本来は恋の狂気に落ちてしまう筈の少女が何やかんや運命に抗おうとするお話。

Fate作品の二次創作です。

物語を都合よく進めるために、独自設定や解釈をする場合があります。

TS要素があります。

わりと何でも許せる方向けかも

# 目次

## 第一章 コルキスの王女

第1話	1
第2話	5
第3話	17
第4話	31
第5話	41
第6話	56
第7話	71
第8話	80
第9話	87
第10話	96
第11話	103

## 第二章 海の怪物と島の魔女

第12話	117
第13話	124
第14話	137

# 第一章 コルキスの王女 第1話

「ああ……どうしてこんなことに——」

顔が焼けるほど熱い。

心臓が破裂してしまうほどドキドキしてる。

自室のベットのうえで、悶えるように暴れる一人の少女の姿が。

少女の名前は『メデシア』。

コルキスという国の王女で、まだ14歳になったばかりの夢見る乙女だ。

メデシアは枕に顔をぐりぐりと押し付けたり、両足を交互に動かしてばたばたとさせる。

その行動はすべて、ある感情を少しでも発散させようとして生じたものだった。

「うう……これも全部あの男の——」

ある感情。

その正体は『恋』という名だ。

少女は恋の病——いや、『恋の呪い』に侵されているのだ……

ここで少女メディアの秘密に少し触れておこう。

秘密と言ってもなんてことはない。

ただほんの少しばかり、『前世』を覚えているだけだ。

——あれはそう、自分が5歳くらいときだった。

ある日突然、何の前触れもなくふつと思い出したのだ。

自分が『メディア』としてある以前に、21世紀に日本人の男として生を授かっ

たことを……

とはいえ、前世についての殆どの記憶は失われていたが、少しだけ困ることがあった。  
『わたし……ぼく? どっちなの……』

記憶の混線、自我の定義の崩壊。

幸いにも壊れてしまう前に、家族の支えもあり『メデイア』として生きる道を選べた。  
今では立ち振る舞いも口調も考え方も、メデイアという一人の女として、王女として  
それなりに相応しくなっている。

……ただ、性の悩みについてはまだ踏ん切りがついていなかった。

今の自分が『女』であることについては理解してるし、受け入れているつもりだ。  
しかし、『恋』となると話は別だ。

王女という立場故に、近い将来『婚約』するかもしれない。

そう、ほかでもない『男性と』。

それに関してだけは、未だに抵抗感があった。

『まあ、そのうち何とかなる』

そう思うようにして、今はひたすらメデイアとして生きることには専念した。

毎日が楽しい日々だった。

家族との絆は確かにそこにあったし、国も平和な方だ。

民と接するのは楽しいし、女神ヘカテの巫女として魔術の研究や鍛錬に勤しむのもやりがいがあった。

すべてが満たされ、幸福に囲まれた毎日。

このまま何事もなく、幸せな日々が続くのだろうと思っていた。

国を出ることもなく、一生をこの国で暮らし、骨を埋めるのだと。

あの日、恋の呪いを宿した神の矢に射抜かれてしまうまでは……

まだ覚悟ができていない筈の自分が、ある一人の男に恋をしてしまうまでは——



## 第2話

「アルゴノーツ……ですか？ お父様」

「ああ、テツサリアから遙々船でやってきたらしい。なんでもこの私と話がしたいとか」  
今日は何をしようかと悩んでいたメディアに、コルキスの王であり、父親でもあるアイエテス王が突然の来客がコルキスに来たことを伝えた。

「珍しいこともあるのですね……それでお会いになるのですか？」

「遠路から長い時間をかけて来た客人を追い返すような真似はせん。だが、信用がなく怪しい連中には変わりあるまい。そこでだ、私の可愛いメディアよ。奴らの謁見に付き添ってはくれぬか？」

メディアは優れた魔術師でもある。

それは本人だけでなく、周りの人間もそう思っている周知の事実だ。

故にアイエテス王は困りごとがあると、よく娘のメディアに相談を持ち掛け、メディアもまた持ち前の魔術でそんな父親を助けていた。

一言でいうと、とても頼りになる娘であり、メディアも頼られることを誇りに思っていた。

今回もまた、アルゴノーツを名乗る連中が謁見中に悪事を働かないよう、もしくは悪事を成した場合、それらから守って欲しいとアイエテス王はメディアに頼んだのだ。

「お任せくださいお父様！ 何かあるうと、お父様をお守りします！ もし首とか腕が取れても、必ず綺麗にくつつけますから！」

「う、うむ。出来ればそうなる前に何とかしてほしいのだが……頼りにしているぞ、メディア。それといつもお前には助けられてばかりだ。何か欲しいものがあつたら遠慮なく申せ」

「本当ですか？ でしたら、竜の心臓とか欲しいです。色々使い道があるので。ほら、いつも寝てばかりのあの竜とかちようどよいのでは？」

「——あれは秘宝を守っている竜だ。そ、それ以外には何かないのか？」

「それ以外ですか、うーん……あ、お花が欲しいです！ コルキスにはないのでちよつと大変かと思いますが」

「おお、花か。お前もようやく年頃のおなごらしくなってきたな。構わん、多少の手間ならいくらでも——それで、どんな花なのさ？」

「はい！ ひとかじりで致死する毒の根を持つ花なのですが、どうやら東の方に……ど

うしましたお父様？ 急に頭を抱えて、頭痛ですか？ メディアの特製の薬飲みますか？  
？ どんなに痛くても（意識ごと）すぐに痛みなんてなくなりますよ！」

——少女メディアについて、ある島に住んでいた大魔女はこう語っている。

あー、メディアね。はいはい、ちょっと頭のどこかが抜けてるって？  
あれはしょうがないのさ。話に通じてるだけまだマシだと思っけどね。  
というか、あれで『良くなった方』だよ。

昔なんて……ああ、思い出すだけで羽根が抜け落ちそうだよ……

え、そっか。ええ、私の羽根って綺麗だよって？

当り前じゃないか、大魔女だぞ？

キユケオーン食べるかい？

……ああ、メディアの話だったね。

実は妹弟子として迎え入れる前に、一度しばらく面倒を見てやった時期があったんだけど……それはもう大変だったよ。

運命のいたずらか、何者かの悪意なのかは知らないけど、幼いメディアは自我崩壊の一步手前だったよ。

やること言うことももう支離滅裂のメチャクチャでね。

なんでかって？ えーっと、確か現代にも似たような言葉が……

——ああ、あれだよ。人格障害だか二重人格だか。

幼いメディアの中にはもう一人別のメディアがいたんだ。

それらがうまくかみ合わなかったのか、互いを排除しようとしたのか。

とにかく見てられないほど可哀想だったよ。

大魔女だって憐れむほどさ。

放つてもおいてもよかつたけど……まあ一応私の『姪』だからね。

幸いにも周りの環境は恵まれていた。

家族からの愛もあつたし、魔術や薬術を駆使してどうにか自我を再定義できたんだ。

すると面白いくらいに精神は安定したし、魔術の腕もメキメキと上げていったよ。

ただ……なんというべきか。

後遺症なのか、性分からああだったのか分からないけど、発想がぶっ飛びがちでね。本当は妹弟子として迎えるつもりはなくて、一度断った時も間髪入れずに洗脳魔術で私の心を無理矢理開けよう——

あ、羽根が……

ま、まあ思考が狂戦士のように狂ってるわけじゃないし、少し天然な箱入り娘と思ってくれ、ピグレット。

それより、キュケオーン食べるかい？

「此度は我々のような余所者を歓迎いただき、ありがたく存じます。アイエテス王よ」

「うむ、遠路はるばるの船旅、さぞ困難と苦痛にまみれたものであっただろう。ゆつくりと我が国で疲れを癒してゆくとよい」

きらびやかな衣服を纏い、爽やかで清潔そうな金髪の青年が、むさくるしい男を何人か引き連れて謁見の間に現れた。

「お心遣い、たいへん痛み入ります——そちらの女性は何？」

「ここでメディアアの存在に気が付いた青年は、アイエテス王に訊ねた。

「私の自慢の娘だ——挨拶を」

「はい、お父様」

着飾ったドレス姿を見せびらかすように一歩前へ。

そして王女として恥じることがないようにな礼をし、一言挨拶を添えた。

「初めまして、お客さま方。メディアアと申します」

……ちゃんとできていただろうか？

こういう経験はあまりしたことがないので、少し不安だ。

「——これはこれは、確かに「ご」自慢の娘さんでしょう。いやはや、たいへんお美しい金髪の青年が値踏みするかのような視線を向けてくる。

——あまり良い気分ではないかなあ。

「——して、私と何か語りたいと耳にいれておるが？ まさか冒険譚を聞かせに来た

わけではあるまいて」

「はっ……実は——」

ここでもようやく本題に入った。

ここからは、話を聞きながら頭の中で簡潔にまとめてみることにしよう。

まず、青年の名前は『イアソン』という名らしい。

彼はテッサリアのイオルコスという国の王になるべく、王位継承の証としてコルキスの宝でもある『金羊毛皮』をとつてくるように、現イオルコス王であり叔父でもあるペリアス王に条件を出されたらしい。

そして彼はアルゴ―船を建造させ、乗組員を募った。

結果として50人ほどの腕に覚えのある英雄たちが集い、アルゴノーツを結成。

幾たびの困難を乗り越えてコルキスにやってきたという——

……他国の秘宝を勝手に王位継承の証にするとか、どれだけ身勝手——いや、どれだけペリアス王はイアソンに王位を渡したくないのが伝わってくる。

「……成る程、事情は分かった。だが、我が国の秘宝をそう簡単に渡すわけにはいかぬ」  
「しかしアイエテス王よ。私は——」

当然、お父様はこれを拒否。

同情だけで国の秘宝を渡せるほど甘くない。

だがイアソンとてここで引き下がらるわけにはいかない立場だ。二人の口争はしばらく続いた——

……結果として、先に折れたのはお父様の方だった。

「——よかろう。そこまで言うのなら、『試練』を与えよう。ただし、後ろにいるようなアルゴノーツの力を借りずに、其方の力と知恵だけで乗り越えるのだ」

「しかしそれは——」

「黙れ、これ以上は譲らんど。今聞きたいのは、試練を受ける気があるのか、ないのかだ」  
「……詳しくお聞きしましょう」

お父様は、イアソンに三つの試練について話した。

「青銅の蹄を持ち、火を吐く牡牛を手懐け、駆つて土地を耕してみよ」

「耕した土地に、竜の歯を蒔くのだ。そして土から生まれしスパルトイをすべて倒すのだ」

「最後に、金羊毛皮を竜が守る場所から取ってくるのだ。ただし、竜を傷つけてはならない」

——しかしその内容は、無理難題に近かった。

さらにこれをたった一人でやれとお父様はイアソンに言った。



さすがのイアソンもこれには苦虫を噛み潰したような表情をする。

「とはいえ、急には決められまい。今日はゆっくと我が国で英気を養い、どうするか考えてみよ」

「……………」

……………こうして、謁見は終わりを迎えた。

(ちよつと気の毒だなあ)

仲間を引き連れ、苦悶の表情を浮かべながら立ち去ろうとする彼の姿に、自分にしては珍しく同情に似た念が浮き出てきた。

——この時、わずかに、一瞬だけ気を抜いてしまった。

お父様と自分を守る防護魔術に、ほんの少し小さな穴をあけてしまった。

その隙を狙うかのように、タイミングよく『それ』はどこからともなく飛来してきた！

「ぐっ——!?!」

それは『矢』だった。

黄金の矢が、メディアの胸を射抜いたのだ！

(まずい! 攻撃、どこから、誰が!?! お父様を守らなきや……………!)

しびれをきらしたアルゴノーツが放った?

でも武器を隠し持っているようには……

否、とにかく刺さった矢を引き抜いて、すぐに治療しなければ。

そして矢を放った相手にきつめのお仕置きを——

「……あら？」

しかし妙なことに、自分の胸に何も刺さっていないことに気が付いた。

おかしい、確かに感触はあつたはずだが……

「どうかしたのか、メディアよ。何やら呆けているが……」

「え、あ、いえ……その、お父様。私の胸、何か変でしょうか？」

「む……おほん。その、実によい形で美しいと思う——ええい、父親に何を言わせる

か。心配せずとも、お前は十分に魅力的だぞ」

……痛みもない。

怪我の痕もないし、出血もない。

お父様も知らない素振りだし、もしかして連日の疲れと今回の緊張で幻覚でも見たの  
だろうか。

(……？ なに、この心臓の高鳴りは？ ——え、どうしてあの男の顔が……)

どつくんどつくん。

ドキドキと痛いほど心臓が鼓動をする。

同時にメディアの脳裏には、先ほど哀愁漂よわせながら去っていたイアソンの顔がこびりつき始めた。

(やだ、この感情は何？ どうして『そばにいて慰めてあげたい』とか思ってるの!?)

メディアの思考や理性を置き去りにして、感情だけが暴走していく。

「……顔が赤いが、体調でも崩したのか?」

「え……うそ、なんでこんな——あ、あの、今日はもう休むことにします！ お休みなさいお父様！」

啞然とする父親を置いて、メディアは自室に駆け込んだ。

魔術で誰も入れないよう、聞こえぬようにしてから、ドレスを乱暴に脱ぎ捨て、着替えもせずにベットにもぐりこんだ。

「ああ……どうしてこんなことに——」

顔が焼けるほど熱い。

未だに心臓は破裂してしまうほどドキドキしてる。

枕に顔をぐりぐりと押し付けたり、両足を交互に動かしてばたばたとさせても、それは収まらなかった。

「うう……これも全部あの男の——」

これ以上は本当にまずい。

メディアは己の心臓が破裂してしまう前に、眠りの魔術を自分に使った。  
すぐに眠気は訪れ、メディアはゆっくりと瞼を下ろしていった……

「——イアソン……さま」

## 第3話

『メディア……』

『イアソン……さま』

『私だけの可愛いメディアよ。どうか私の妻になってくれ』

『そんな……まだ逢ったばかりなのに——』

『お前しかいないんだ』

『あ——そんなダメです。まだ契りも交わしていないのにそんな……いい、イアソン

さまあ——』

メデアはベッドから跳ね起きた。

「——な、なんて夢を……」

羞恥に耐え切れず、誰も見ていないというのに両手で顔を隠すように覆った。両手から伝わる顔の体温はいつもより高かった。

「あんな夢を見るということは……気の迷いとかじゃないのかしら——」

まさかそんなことがあるわけがない。

だつてよりもよつて、『男に一目惚れ』するなんて……

確かに今の自分は、どちらかと言うと女性の心にだいぶ近づいてるし、それを受け入れるつもりでもある。

けど、まさかそんな急に……

メデアはふらふらとベッドから立ち上がり、常備されてる水差しから水を一杯コップに注いだ。

そして一気に中身を飲み干した。

渴き気味だった喉はそれで潤おせたが、身を焦がすような熱と感情は収まらない。それどころか、徐々に昂っている気さえする。

なんだか変な気分だ。

いつもの自分が薄れていき、新しい自分に変わっていくような。

『いつもと違う』自分が、その先で待っていてくれるような……

ああ……意識がぼんやりとし、思考が鈍く——

ああ……彼が恋しい。

彼の傍にいたい。

彼が傍にいないのがつらい。

彼に愛を囁きたい。

彼の愛が欲しい。

彼の寵愛を受けれるなら何でも——

いいかい、妹弟子よ。魔術を扱う者としての心構えを一つ教えよう。

はい、叔母さま！

叔母さまはやめないか！ 名前にさま付けで呼ぶように！

はい、キルケー叔母さま！

違うそうじゃない。『叔母』が余計なんだよ。

……？

なんだいその『叔母さまは私の叔母じゃん』みたいな顔は——ふう、まあいいや。一度しか言わないからね。よく聞くように。

はい、叔母のキルケーさま！



いや、言い換えの問題じゃないからな……こほん。魔術は常に『自分との戦い』だ。これを忘れないように心に刻んでおくんだ。

はい、質問です！ どうやって自分と戦うんですか？ 召喚術の一種とか？

あー、言い方が悪かったかな。物凄く分かりやすく言い直すと、『理性を常に保て』だ。本能で魔術を使うな、感情に身を任せるな。思考を止めてはいけないし、流されるのもダメだ。

どうしてですか？

……ロクな結果にならないからだよ。自分を律して、常に自分を『疑い続けろ』。ああ……特に、『いつもと違う』と感じたら危険の合図かもね——

「——叔母……さま」

消えかけていく思い出の片隅で、ふと大好きな叔母とのある日のやり取りを思い出した。

「……だめ、気をしっかり持つのよメディア。戦わなきゃ——」  
ほんの一瞬だけ、メディアは己を取り戻した。

しかし、押し戻しても、再びせりあがってくる得体の知れない感情の波。

このまま何もしなければ、先ほどの二の舞だろう。

そこでメディアアは、感情を抑える魔術を試してみた。

あまり使い道がなく、普段はあまり使うことのない魔術故に、正直過度な期待はしていなかった。

だが予想は、良い意味で裏切られたのであった。

「……あれ、思ったより落ち着けた……？」

イアソンという男を愛したい、愛されたいという気持ちは完全には消えなかったが、それでも冷静な思考を取り戻すくらいには落ち着けた。

よし、まずは物事を整理しながら考えることにしよう。

「……一目惚れとか、経験はないのだけど……それにしたって、おかしな話だと感じる」  
そもそも一目惚れが今回の自分の不調の原因だとしたら、イアソンに挨拶をしたあの瞬間から自分の異変に気が付くのではないだろうか。

恋の経験はないし、確証もないから何とも言えないが……

だが、一つだけ確かなことがある。

イアソンなる男に夢中になり、心臓が破裂するほど鼓動を強めてしまう『直前』に、『不可思議な出来事』があったことだ。

「あの矢……やっぱり幻覚の類ではない……？」

それは、イアソンが退出した直後、どこからともなく飛んできて、メディアの胸を射抜いた『黄金の矢』のことだ。

あれがもし、実在してメディアの胸を本当に射抜いていたとしたら？

その矢に、何か『細工』が仕込まれていたとしたら——？

「……確認するしかないみたいね」

メディアはそういつて、着ていた服をすべて脱ぎ捨てた。

一糸まとわぬ生まれたままの姿になった彼女は、自身の身体を隈なく調べ始めた。

（もし……もしあの矢が考えているようなモノだとしたら、必ず何処かに『痕跡』が——

↓

口の中や、普段見えにくい場所も確認していく——

しかし、何も見つからなかった。

「表面にはない……じゃあ内側？」

魔術を使い、身体の内側。

つまり内臓などに異変がないか探った。

だがこれも特に異常はない。

次に魔術を使うための回路や、血管などの細かい部分を調べていく。

「ここにもない……じゃあ最後はあそこね」

そこに痕跡があることを願う自分と、全部気のせいであつてほしいと思つている自分がいる。

どちらの望みが叶うのか。

それを確かめるべく、メディアは意識を集中させ、深く己のナカへ潜つていった。

(…………… あつた！ まさかこんな深い場所まで——)

そこはメディアという人間の深層意識。

心象風景を映し出す彼女だけの世界。

本来異物なんて受け付けない筈の世界に、探していたものがあつた。

それはまさしく『黄金の矢』。

神々しく美しい芸術品のような矢が、メディアの世界にまるで杭のように深く、痛々しく突き刺さつていた。

——間違いない、これが元凶だ。

メディアの心を惑わせ、偽りの感情を植え付けた元凶。

メディアはこれの除去を早急に試みた。

(…………… ツ！ だめ、どうやっても取り除けない……こんなに強力な『呪い』、いつたい誰が——)

しかしいかなる手法を用いても、それはかなわなかった。

名付けるとしたら、さしずめ『恋の呪い』だろうか。

名前に反して非常に強力で、凶悪な呪いだが。

「——ふう、いったいどうしたら……」

メディアは沈ませていた意識を浮上させ、現実へと帰還した。

ここままで得られたのは、自分が呪いに侵されていて、それを解呪することは今のところ不可能という事実だった。

一歩進んだと思ったら、すぐに行き止まりに阻まれたような気分だ。

「せめて誰の仕業か分かれば……怪しいのはやっぱりイアソンさま——じゃなくて、あの男なんだけど」

しかしイアソン含めたあの場にいた誰かが、メディアの一瞬隙を狙って、強力な呪いを矢に込めて放てるような優れた魔術師、もしくは呪術師の類とはとても思えない。

もしくは何者かが存在を隠蔽して潜んでいた？

「どつちにしろ、私の陣地で私を出し抜いて、解呪不可能な呪いを打ち込めるような者が相手というわけね……それこそ、『神』のような力を——」

——いやまて。

まさかそんなことが……？

メディアアは考えうる限り一番最悪な仮説を思いついてしまった――

「クソっ！ こつちが下手に出てればいい気になりやがって……！」

他には誰もいない、夜の月明かりに照らされたアルゴ―船。

その甲板の上で、イアソンは荒れていた。

「試練を一人でこなせだど？ 確かにオレには才があるが、向き不向きがあるだろうが

！ オレの才は決して怪物と戯れたり、剣をいたずらに振り回すのに使うものではない

！  
「  
イアソンはちようど頭がすっぱり隠せるくらいの大きさの空の樽を何度も蹴つ飛ばしては、鬱憤を晴らそうとしている。

——イアソンとて、王を目指す一人の男だ。

試練を与えられたのなら、それを乗り越えたいとは思わなくもない。

冒険譚はいくつあっても困りはしないのだから。

だが、認めたくはないが、無謀な行いを英雄のようにこなせる人間ではないことは分かっている。

自分ができないこと、苦手なことはそれを得意とする者に任せればいい。

そのためのアルゴー船、アルゴノーツをイアソンは率いているのだ。

実際、そのおかげでコルキスまで来れたのだ。

そして力ある者を従えることができるのだから、それは間違いなく自身の『力』だ。  
——だが、その力を使うなどあの愚者は言った。

そんなの、両手足を引きちぎられて、『立って歩け』と言われているのと同じだ。  
困難があるからこそその試練。

それを乗り越えてこそその英雄。

それには共感できるが、『不可能』に挑むのは単なる自殺だ。

愚かな行いだ。

つまりあのアイエテス王は、イアソンを愚か者にして、笑い者にする気しかないのだ。——考えろ。ここまで来たんだ。今更引き返せるものか」

あきらめるといふ選択肢は無い。

イアソンは樽に片足を乗せたまま、頭を動かしていく。

「秘宝を奪い取る……不可能ではないが、こちらの損害が多くなるな。小国とはいえ、それなりの力はあるだろう。そもそもこっちは使える船が一隻しかない」

力づくは本当の最終手段だ。

何も望んで他国ともめ事を起こす気はないし、何人かの船員から反発も出てくるだろう。

最善手とはとても言えない。

「となると……『協力者』を見つけるのがやはり妥当か」

アイエテス王は言った。

『アルゴノーツ』の力を借りてはいけないと。

ならば、アルゴノーツ『ではない』者の力を借りればいい。

このコルクィスで試練に役立ちそうな協力者を見つけるのだ。

そう、これは単なる言い訳じみた主張だ。



だが、あちらが先に無理難題を吹っかけてきたのだから、こちらも多少抜け道を通ろうとしても構わないだろう。

それにイアソンの頭には既に、協力者に相応しい逸材にあたりをつけていた。

もしその協力者が想像以上の働きをしてくれたのなら、上手くいけば試練なんてやらなくても秘宝が手に入るかもしれないのだ。

「あの『メディア』とかいう王女——聞けば優秀な魔術師だそうじゃないか。こいつはきつと使える……」

ある程度コルキスについて情報を収集していた時に、謁見の間にもいたメディア王女の名を何度か耳にした。

なんでも、女神から魔術を教授され、家族や民からの信頼は厚く、よく頼りにされるほどの腕前らしい。

基本的に魔術に興味はないし、魔術師という人種もあまり信用していないが……

まあ相手はちんちくりんの子どもだ。

利用はし易いだろう。

計画はこうだ。

まずはどうにかしてメディア王女を籠絡して、その魔術の力を試練に利用させてもらう。

もちろん、アイエテス王にはバレないように。

もしくはメディアア王女からアイエテス王に口添えをしてもらい、試練そのものを有耶無耶にしてみよう。

これだ、これしかない。

「問題はどうか接触するか……そしてどう言いくるめるかだな。いつそ『あなたの為なら何でもします』と言つちまうくらいに、このオレに……そう、例えば『惚れたり』してくれば楽なんだがな！」

愛や恋は人を盲目にする。

なんでも言うことを聞く駒を作るには、人の強い感情を利用するのが楽だ。

そんな楽観視をイアソンは冗談まじりにしつつ、計画をより精密にする為に思考をさらに広げていこうとする。

——それ故に、自分に近付いてくる足音がある事に、彼は気が付いていなかった。

## 第4話

「——あの、今晚はっ！」

「どおうわあ!？」

考え事をしていたイアソンは、いつの間にかすぐ近くに居た人物に気が付かなかった。

突然の声に驚いて、足先で弄んでいた樽ですってんころりん。

咄嗟に頭は守ったが、背中と尻を思いつきり強打し、尻餅をついた形になった。

「いっづツ……!」

「あ……ご、ごめんなさい! つい大声で……」

——少女の声だった。

しかも聞き覚えのある。

イアソンはその声に反応して、ゆっくりと顔を上げた。

——風の強い夜だった。

風に揺らされて、少女の長い薄紫色の髪が絹のように靡いている。

——月と星の光が眩しい夜だった。

地上を照らす夜の光が、少女も例外なく照らしている。

「……」  
イアソンは基本的に浪漫というものを持ち得ない。

美しいモノを美しいと認める事はあるが、それは単純に『事実』だから。

事実を口にはしているだけだ。

だが決して、それらに憧れを抱いたりはいはしない。

浪漫や幻想に憧れを抱いたところで、意味がないと思っっているからだ。

つまりイアソンはこれまで、どんなに美しいモノを見ても、決して『掛け替えのない』だとか、『尊い美しさ』など、抽象的で哲学的な感想を感じた事はなかった。

……だが、この夜運命の夜だけは特別。

イアソンは理性ではなく、本能で感じてしまった。

月と星の光で照らされた少女の姿を、幻想的で尊ぶべき美しさだと——

「——あの、立てますか？」

「……あ、ああ。け、結構だ。一人で立てるとも」

——イアソンの思考は現実に戻った。

……今のは何だったのだろうか。

断言するが、決して見惚れてたりはしていない、

おそらく、雰囲気と場に少し当てられたただけだ。

そう思いながら、イアソンは差し出された手を断って、立ち上がったからその正体を改めて確かめた。

(こいつ……やっぱリメディア王女じゃないか！ 何故オレの船に——いや、それよりも願ってもないチャンスだ！ どう接触するか悩んでいた矢先に向こうからやって来たんだからな！)

少女の正体はやはり、メディアだった。

イアソンは内心で笑い、表面でも作り笑いをする。

「——これはこれは王女様。こんな夜中に、私の船に何か御用ですか？」

見た限り、護衛の類は居ないようだ。

魔術師とはいえ、王族の女が一人で出歩くななんて頭がどうかしてるのか？

そんな事を思いつつ、イアソンはとりあえず取り繕った挨拶をした。

もちろん、爽やかな笑顔を忘れずにだ。

「えっと……その、少しお話がしたくて——」

「私にですか？ えええええ、構いませんとも。王女様の為ならいくらでも時間を作りましょう」

「……他の方達は？」

「ん？ アルゴノーツの船員達の事ですか？ 彼らなら、コルクスの街で英気を養いに行きましたよ。私は船長として、留守番しているのです」

本当は鬱憤を晴らすために、誰にも見られない場所で樽に八つ当たりをしていただけだが。

「つまり……二人きり、なのですね」

そう言つて、メディア王女は俯き気味だった顔をあげて、改めて真つ直ぐにイアソンの顔と合わせた。

(……………は？ なんでこの女、目に見て分かるほど顔真つ赤にしてるんだ?)

何か病の類だったら勘弁してくれ。

うつされてはたまらない。

——しかしイアソンはどっちかという賢い男だ。

メディア王女の表情、潤んだ瞳、やや荒い呼吸に気が付いた彼は、すぐに別の結論に至った。

(あれ……………もしかしてこれ、もう墮とせてるのか?)

無論、まだ何もしていない筈だ。

だが、自分の容姿や立ち振る舞いを持つてすれば、一言挨拶を交わしただけで、その姿を見せるだけで、女一人を墮としてしまつても不思議ではないのでは？

「……………こんな所で立ち話もなんです。どうぞ船内へ。私の自慢の船をご案内しながら話しましょう」

イアソンは仮説を確かめる為に、ある行動をとった。

メデアア王女の隣に立ち、その小さな肩に優しく手を置いて、耳元でそう囁いた。

「ぴやつ……………あの、その——」

——その反応を見て、イアソンは確信した。

こいつ、オレに惚れてるなど……

「どうかしましたか？」

「……………」

完全に黙りこくってしまったメデアア王女。

イアソンは思い掛けぬチャンスが巡った事に感謝しつつ、あとは『仕込む』だけだと意気込む。

記憶に残る強烈なモノを与えて、あとは都合の良い協力者の出来上がりだ……

「……………も——」

「もっ」

「——もう我慢できません！」

突然、メデアア王女が声をあげて、どこから取り出したのそれ、と聞きたくなるよう

な杖を振りかざした。

するとどうだろうか。

さつきまで蹴り飛ばしていた樽が宙に浮き、そのまま自分の頭目掛けて――

「な、何だこれは！ た、樽が頭に……！ 取れねえ！ 真つ暗で何も見えねえ！」

目の前で顔を隠すように、樽を頭から被つて無様な踊りを披露するイアソンを、呼吸を整えながら見つめる。

――よし、顔さえ見えなければ、いくらか冷静さを取り戻せる。

「はあ……心臓が破裂するかと思つた――」

恋の呪いは本当に恐ろしいものだ。

魔術で感情を抑えても、彼が近くにいる場合精々数分が限度のようだ。

……念の為もう一回掛け直しておこう。

「おい、突然何しやがる！」

「化けの皮が剥がれ易いのですね。イアソン……じゃなくて、タルソンさま<sup>樽</sup>」



「誰がタルソンだ！」

それにしても、手を出そうとするのが早かったのと、先程の独り言といい、やはり自分を試練にでも利用しようとか何とか企んでいたのだろうか。

「何が目的だ！ お、オレを殺しても何の得にもならないぞ！」

「さつきも言いましたけど、少しお話がしたいだけです」

その言葉が信じられないのか、ギャーギャーと暴れるイアソン。

罅があかないので、強行策を取る事にした。

メディアは圧縮魔術を、イアソンのある部分に軽く掛けた。

「ひゅえ……！」

「それ以上喚き散らすなら、睾丸を潰します♡」

「撫で声でなんて事言いやがる……！」

「あと、これからする質問に嘘をついても潰します♡」

「ひゅえ……！」

ようやく大人しくなったイアソン。

これでやっと落ち着いて話ができる。

……しかし何だろうか。

こうして悶えてるイアソンを見ると、心の何処かがムズムズする。

「——タルソンさま」

「イアソンだ！」

「タルソンさま」

「だからイア——いえ、何でもありません。私はタルソンですだからそれ以上オレの大事な部分をイタタタタ！」

少しやり過ぎかもしれないが、こういう如何にも傲慢で、物に八つ当たりするような輩には、自分が相手より下だと認識させた方が良い。

「それじゃあ一つ目の質問行きますね！——貴方、『神』の加護を受けてる、もしくは受けた事がありますか？」

イアソンはこれにイエスと答えた。

嘘は付いていないようだ。

「二つ目、私を利用しようと思つてますか？」

彼はイエスと答えた。

嘘は付いていない。

「……最後の質問です。私に、『呪い』を掛けるよう神を仕向けましたか？」

——イアソンは『ノー』と答えた。

嘘は……付いていない。

つまりこの呪いは、彼の意味ではないものだ……

だが、『神』の仕業なのは間違いないだろう。

状況的に考えて、今回の犯行ができるのは、人智を超えた神の力しかない。

「……でも私を彼に惚れさせてどうするっていうの？ —— いえ、それは分かりきつてる。何かなんでも、彼に協力させる気なのね……」

「さ、さつきから何の話をしてるんだ？」

……状況が飲み込めてない彼に、自分を蝕む呪いについて教えた ——

「はあ!? 何だそれ、そんな呪い知らんぞ！ 大体オレの好みはお前みたいなチンチクリンじゃなくて、もう少し成長したくらいの年若い大人の女だ！ 本気で惚れさせるわけが —— ああがつ！ な、生意気言つてすいません！ 潰れる潰れる！ 助けてヘラクレスウウウウ！」

「はあ……となると、タルソンさまに呪いを解く手段はないか。あとは『条件』を満たすくらいかしら。もしくは『叔母さま』に相談して ——」

矢が飛んできたのはお父様が試練の話をした後だった。

イアソン一人では試練を乗り越えるのは難しいと即決した神が、自分をイアソンに惚れさせて、無理やり協力させようとした——おそらくそんなところだろう。

しかしそれが事実だとして、どんな事情があつてその神はイアソンの味方をしているのだろうか？

本人に聞いても特に心当たりはないと言うし……

「はあ、ヘカテ様の神託も降りなかつたし……かといつて魔術でずっと抑えるのも限界があるし——」

「な、なあ。そろそろこの頭の樽取つてはくれないか？ あと大事なところを締め付けるのもやめてくれ。感覚が無くなってきた」

「今タルソンさまのお顔を見たら、私の心臓が持たないのでダメです。ドキドキが止まらなくて、破裂しちやいます」

「その前にオレの大事なところが破裂するんだが王女様!？」

「そんな王女様だなんて。もっと気軽に名前前で呼んでくださつていいですよ」

「じゃあメディア！ 早くオレを解放して——」

「まあ、呼び捨てだなんて。馴れ馴れしくしないでください」

「どうしろと!？」

## 第5話

『取り引きだ!』

『取り引き……ですか?』

『オレはお前の国の秘宝が欲しい。そして王になりたい! お前は呪いをどうにかしたい! もしオレに手を貸したのなら、その札に呪いを解く手伝いをしてやっても良いぞ!』

『……具体的には?』

『………何とかなる! そのうちな!』

「——そういうことなんです、お父様」

「おお……私の可愛いメディアアよ。本当に呪われてしまったというのか？」

「残念な事に……タルソン——じゃなくて、イアソンさまの話を聞く限り、おそらく神の仕業なのは間違いないかと」

翌日、色々と考慮した結果、正直にお父様に伝える事にした。

「何たることか……呪いを解く手段は？」

「まだ見つかっていません。今のところ解ける見込みは、条件を満たす事です。この場合、イアソンさまが金羊毛皮を手に入れ、イオルコスに持ち帰り王になる——というのが、呪いを解く条件となりそうです。つまり、彼が王になれるようその手助けを最後までする事です」

憶測な為、正確な事は分からない。

もしかしたら生きてる限り一生解けない呪いかもしれないが……

信じたくもないし、今お父様にそう伝えるのは火に油を注ぐものだ。

「……ならばあの男を殺そう。さすれば呪いも解けるのでは？」

「それは悪策です、お父様。仮にイアソンさまを殺しても、呪いが解けなかった場合……その、感情を抑えきれなくなった私が彼の後を追おうとするかもしれない」

「それは……いや、愛というものは深淵よりも恐ろしいものだ。たとえ偽りのものだつ

たとしてもな」

何か心当たりがあるのか、お父様はえらく簡単に納得した。

……お母様と昔何かあったのだろうか？

「——それで考えたのですが、やはりここは神の思惑に乗るしかないと思うのです」

「……それは、あの男を愛し、イオルコスまで追っていくという事か？」

「あくまで愛した『フリ』です。油断したら呪いにぽっくりと墮とされてしまうかもですが……」

今は何とか堪えているが、自慢の魔術を以てしても、完全に感情を制御できない以上油断はできないだろう。

「流れとしては、アルゴノーツに加わり、イオルコスまで彼を無事に送り届け、王になるのを見送ります。おそらくそのタイミングで呪いが解けるので、そうしたら金羊毛皮を返してもらい、故コルクス郷に帰ります」

金羊毛皮はあくまで、イアソンが王位継承を認めてもらうための証。

王になった後の彼には必要のないものだろう。

あっさりと返してくれる筈だ。

そうじゃなかったら、力づくで返してもらうだけの話。

「むう……しかし呪いを解く為とはいえ、愛娘を船旅に、しかも聞けば男ばかりというで

はないか」

「まあ英雄を集った船らしいですから……一応女の人も何人かいるらしいですよ？」

「しかしだな——」

お父様の気持ちはよく分かる。

だが、このままでは話が進まない。

なので気は進まないが、最終手段だ。

「——お父様」

「な、何だ」

「お願いします♡」

「ぐむっ……」

——メディアはあまり、自分から我儘やおねだりをする事はない。

別に甘えたくないわけではないが、少し後ろめたいのだ。

あまり当時のことはよく覚えていないが、メディアが幼い頃は家族やその周りの人間に多くの心配と苦勞をさせてしまった。

精神と自我の不安定が原因で、沢山の人を悲しませ、傷つけたであろう。

いつ見放されてもおかしくはなかった筈だ。

それでもメディアを見捨てなかった家族に、これ以上何かを求めるのはしたくなかつ



たのだ。

求めようとして、愛想を尽かされたらどうしよう。

嫌われたりしたらどうしよう。

そんな不安がメディアに付き纏っていた。

——だからメディアは、一步引いた距離で常に人と接する。

……さて、そんなメディアが可愛い声でお願いをしてきたら、アイエテス王はどんな気持ちになるのだろうか——

「……………分かった」

「ありがとうございます、お父様」

当然、止めれる筈が無かった。

だが彼にも、譲れないものがある……

「——だが、条件がある」

「条件……ですか？」

「奴に与えた三つの試練。無事に乗り越える事ができたら、我が娘を連れて行く権利も与える」

それはつまり……

金羊毛皮という景品に、自分も付け足すと言う事だろうか。

「えつと……お父様？　今のところ呪いを解くには、イアソンさまにどうしても王になつて頂くしか——」

「分かつておる。話は聞いていたし、理解もしている。だが、それとこれとは話が別だ。あの程度の試練を乗り越えられぬ輩に、お前を預けるわけにはいかぬ」

「あの程度つて……結構無茶だと思えますよ？　イアソンさまが誰もが驚く程の勇氣と力を持っている方だったらまだ分かりますが——」

「……それなら、一人だけ仲間を試練に連れていく事を認めよう」

……これ以上は譲歩してもらえないだろう。

お父様つて、結構頑固なところもあるんだなあ。

「——分かりました。ではそのように伝えておきますね」

「さて、メディアよ。お前が行く必要はない。伝令に任せればいいではないか」

「自室で籠つてろと仰るのですか？　いやです、私居ても立っても居られないんです。自分に関係がある事に関しては特に」

「だ、だが……ええい、お前がそう言つたら何を言つても無駄か。全く頑固者め」

「むう……それはお父様の方でしょうか？」

——二人をよく知る第三者がこの場にいれば、『どっちもどっちだ』と言うだろう

……

「——メディア姉さま！」

——王の執務室から退出したメディアに、背後から飛び付くように抱きつく者がいた。

「まあ、『アプシユルトス』。もしかして、ずっと待ってたの？」

それはメディアと同じ、アイエテス王の子であるアプシユルトスという名前の男児だった。

年はメディアよりも下、つまり彼女の『弟』だ。

「はい！ お父さまとお話は終わりましたか？」

「ええ、ちよつと予定通りとはいかなかったけど……」

「じゃあ、僕と遊んでください。今日のために、勉強もがんばって終わらせました！」

「あら、良い子ねアプシユルトス。でも今日は——いえ、しばらく一緒に遊べないの。ごめんなさいね？」

メディアの言葉に幼いアプシユルトスは、不安な表情でメディアに問う。

「どうしてですか？ 僕のこと、嫌いになったのですか？」

「違う、違うのよ。姉さまは……ちよつとだけ、旅に出るかもしれないの」  
「それなら、僕もついて行きます！」

アプシュルトスにとって、メディアはよく一緒に遊んでくれる良き姉だ。

それだけの理由ではあるが、まだ幼い彼にとってそれは、一番の信頼を寄せるに充分な理由だった。

「……それはダメよ、アプシュルトス。遊びで旅に出るわけじゃないし、何が起こるかも、帰れるのかも分からない危険な旅なの」

「なら尚更です。僕がメディア姉さまを守ります」

「——優しいのね。でも、気持ちはとても嬉しいけど、やっぱりダメよ」

「……どうしてですか？」

「あなたには、私の代わりをしてほしいの。お父様、お母様、お姉様……家族、この国や民たち——私の好きなものを、どうか守って」

——アプシュルトスは、まだ年相応の普通の子どもだ。

メディアのように魔術を習っているわけでも、特別な才を発揮しているわけでもない。

だが、メディアの言葉はそういう意図で言ったものではなかった。

メディアはアプシュルトスに『待っていてくれ』と伝えたかったのだ。

大好きな家族、国や民と共に、自分の帰りを待っていてほしいと。

もし本当に旅に出る事になったとしても、故郷に帰る理由を、意味が欲しいと。

「——わかり、ました……僕が、メディア姉さまの代わりに皆を守ります！」

メディアの意図を彼が察したのか、それとも言葉通りの解釈をしたのか。

どちらにせよ、アプシユルトスは納得して、元気な声でメディアにそう告げたのであった。

「……ありがとう、アプシユルトス。私の可愛い弟」

メディアはアプシユルトスの頭に手を乗せ、そう言った。

「——そうだ、これからアルゴ―船の船長に用事があるのだけれど……一緒に行く？」

「！ 行きます、国外から来た大きな船ですよね？ 僕、近くで見たいです！」

「あのバカ船長はどこに行った？ 物資の補給の指揮をほっぽり出して」

「俺に聞かないでくれ」

「汝と何か話をしているのを見ていたぞ。行き先を知っているのではないか？ それとも、また投げ飛ばして思い出させてやろうか？ ペレウス」

「そりゃ勘弁……話つていつても、『また』いつもの発作だったぜ。何であいつがないんだ？だとか何とか」

「……ああ、『ヘラクレス』の事か。まだ引きずっているのか？」

「気持ちは分からんでもないがな——あと、股間が痛むから療養しに酒でも呑みたいとか」

「股間……？ 船医に診てもらえば良い話ではないか」

「だから俺に聞かないでくれ。あと、行き先は本当に知らん。まあ、コルキスの酒場の何処かにいるんじゃないか？」

ペレウスと呼ばれた男はそう言って、手をひらひらさせながら去って行った。

ペレウスに問い掛けていたのは、獣のように鋭い目つきをして、無造作に伸びた髪を持つ『アタランテ』という名の狩人だった。

彼女もアルゴノーツの一員であり、その船長に一つ文句があり先程から探しているのだが……

「仕方ない、尻を引つ叩きに行くでしょう」

アタランテは船長……イアソンという男の事は正直に言うとは嫌いな方だ。

だから彼が落ち込んでようが何だろうが、関係ないと割り切れる。というより、何故あいつの代わりを私がしなくちゃならないのだ。彼女は今そういう気分でいっぱいだった。だから面倒でも、イアソンを探す事にした。

「わあ……見てください姉さま。本当に大きい船です」

「ええ、本当に大きいわね」

停泊してるアルゴ―船から降り、町の方へと向かおうとしていたアタランテの耳に、そんな会話が入ってきた。

明らかに幼い声と、ほんの少しだけ幼い声だった。

きっと町の子供達が、物珍しさにアルゴ―船を見に来たのだろう。

昨日も何人か、コルクスの民が見学にやって来ていた。

国外からの客人は珍しいらしく、港に見知らぬ船が来るたびに同じ事をしているのかもしれない。

( ) はいい国だ。子供達が皆笑顔で、活気がある )

小さな国ではあるが、一日過ごしただけでこのコルクスという国が比較的平和で、治

安が守られているのがよく分かる。

何より、子供が元氣良く走り回っていたり、はしゃいでいる様子を見るだけで、アタランテは自分のことのように嬉しかった。

——そうだ、この光景が当たり前であれば良いのだ。

女だからと、それだけで捨てられた自分のような子供が、親の愛護を受けられない不幸な子供がこの世界に居てはいけないのだ。

居ていい筈がない。

(……姉弟か？ 仲が良さそうで何よりだ)

ふと、少し気になって声の間こえてきた方に視線を向けた。

そこには、薄紫色の髪の少女と、男児がいた。

二人は手を繋いで、アルゴー号を見上げている。

男児の方はよほど琴線に響いたのか、少女の手をぐいぐいと引つ張つて興奮している様子だ。

対して少女はそんな男児を見て、微笑ましそうに笑顔を浮かべていた。

(——いかな、すべき事をしなくては)

ずっと見ていたい気もするが、目の保養になっただけで充分だ。

アタランテは視線を戻して、歩を進める——



「——あの、少しよろしいですか？」

——歩みは、少女の声によって止められた。

「アルゴ号の船員の方ですよね？ 船長と少しお話が——」

「姉さま！ この人大きな弓を背負ってますよ！ かつこいいです……！」

「こら、ダメよ。初対面の方に失礼でしょ？ ——弟が失礼をしました」

アタランテは振り返った。

そこにはさっきの姉弟がいた。

「……気にする事はない。子供はそれくらい無邪気であるのがちょうど良いと思う——

——して、私に何か？」

「——はい、アルゴ船の船長とお話したいので、呼んできてもらえると……あ、こちらから出向いた方が良いですか？」

「ふむ……？」

アタランテは首を傾げた。

なぜ、この少女はイアソンと会いたがっているのか。

そもそも、どういう関係だろうか。

「……もしかして、私の事は何も聞いてないのですか?」

アタランテの様子に、少女はもしやと思ひそう訊ねてみた。

「ああ、汝の話は何も聞いていないぞ」

「んー……じゃあ、お父様が彼に与えた試験については?」

「試験……?」———「そういえば、この国の王に謁見したその日に、そんな事を喚い

ていた気がするな。詳しい内容は聞いてないが」

「……どうして大事な事を伝えてないのですか、イアソンさまは———」

「イアソン『様』?」

「何でもないです———兎に角、彼に会いたいのですが……」

アタランテはどうしたものかと悩んだ。

信用云々の話は置いてくにしろ、会わせる相手が今ここには居ないのだ。

「———悪いが、汝の願いは叶えられん。奴は今不在だ」

「不在……ですか———まったく、勝手なイアソンさま。船で返事を待つって話だった

のに……それで、彼は今何処に?」

「詳しい場所は私にも分からん。むしろ私も奴に用があつて探そうとしているところだ

……酒を飲みに行くと言つていたらしいから、町の酒場にいるのかもしれないが———

」

「それなら、ご一緒に探しませんか？ 町の案内も私ならできますし」

「……そうだな。では遠慮なく頼らせてもらおう——私はアタランテ、単なる狩人だ」  
アタランテが名乗ると、少女はハツとした表情をした。

「——申し遅れました。私はメディア……単なる魔術師です♡」

## 第6話

「くっそお……何で、何で帰ってこなかったんだよ——ヘラクレスう」

「——何があつたか知らんけどよ、異国の船長さん。ちと飲み過ぎじゃねえか？」

「うるせえ、こんな田舎の酒場のくせに美味しい酒なんか出す方が悪いんだ」

「それ、褒め言葉として受け取ってもいいのか？」

——イアソンは荒れていた。

酒を空っぽの胃袋に流し込み、ひたすら思考を鈍らせていく。

それでもしないと、悲しみに囚われてしまうからだ。

「その……ヘラクレス？ そいつにも何か事情があつたんじゃねえのかい？」

「ハッ、お前にヘラクレスの何が分かる。大体あいつのこと何も知らないとか、田舎にも

ほどがあるだろこの国」

「まあ、わりと閉鎖的な国だからなコルクスは。そのお陰で比較的平和でもあるんだが」

面倒見が良い事で知られている酒場の主人の男は、態度のでかいイアソンにも嫌な顔ひとつせず話し相手になっていた。

「……それにしても、こんな明るいうちから飲んで大丈夫なのか？ 船長さんなら、何かと忙しいんじゃないのかい？」

「休憩だよ休憩。大体、こんな明るいうちから店開けてるのは誰だよって話だ」

「ハハハ、俺には他にやる事が無えからな！ こうして朝から晩までジョッキを拭きながら突っ立ってるんだよ」

イアソンは何杯目か分からない酒を、一気に飲み干した。

そしてまだ足りないといわんばかりに、もう一杯おかわりを要求しようとした瞬間だった。

イアソンが開けた時以来、一度も開かなかった酒場の扉が、軋む音を出しながら開いたのだ。

イアソンは反射的に、扉の方に目をやった。

するとそこには――

「――こんにちは！ イアソンさま！」

「げええ!? 股間潰し女!」

メディアはイアソンの存在を確認して、すぐに魔術を行使した。

感情を抑えるものと、物質を操るもの二つの魔術を。

すると店の片隅に積み上げられていた、空の酒樽の一つが浮遊し、イアソン目掛けてすっ飛んでいった。

「なっ……いっ！ よ、よせ！ 樽をかぶるのはもうゴメンだ……いっ！」

——イアソンは戦いには向かない男だ。

だが彼とて、数多の英雄を育てたケンタウロスの『ケイローン』のもとで学んだ弟子の一人だ。

酔っついていても、自らを襲う危機から逃れるくらいの技量は備わっている。

むしろ危機が大きければ大きいほど、近ければ近いほど。

追い詰められたイアソンは、ここぞというときに真の力を発揮するタイプでもあった

「——そこだ！」

「あら、避けられちゃいました」

椅子を蹴飛ばす勢いで、横に飛んで飛来した樽を見事に躲したイアソン。空振りした樽はイアソンが座っていた椅子と激突し、破片が飛び散った。

そしてイアソンはそのまま、カウンターを飛び越し、カウンターの裏側に身を潜めた。

「あー……メディア王女？　こいつは一体何の騒ぎで？」

「ごめんなさい、オレンさん。壊したものは後でちゃんと直しますので……とりあえず彼を引き渡してくれませんか？」

「おい！　このまま匿ってくれ！　あの女はオレの大事な所を潰そうとして、尋問してきたんだ！　今度はオレを殺しに来たにきまつてる！」

——この時、イアソンは酔っていた。

この瞬間に限って、イアソンの思考はいつも鈍っていた。

故に、メディアの呪いや試練については頭から綺麗にすっぽ抜けていて、樽で視界を塞がれ鞆丸を潰されかけ、そして脅されながら質問に答えさせられた——という若干トラウマに残った恐怖の記憶しか残っていなかったのだ。

そんな恐怖の象徴が突然現れたのだから、イアソンは全力で逃げに徹しようとしていた……

「ふむ……」

そんな中、事情も事態もあまり飲み込めていない酒場の主人、オレンという男。オレンはまず、カウンターの裏に居座り始めたイアソンを見た。

「……………ブルブル」

泣きそうな顔で、自身の脚にしがみ付いて震えていた。

その顔は、助けを求める哀れな表情だった。

次にオレンは、メディアの方に視線をずらした。

「……………」

にここに。

何も語らず、メディア王女は今日も可愛らしい笑顔だった。

にここに、にここに。

メディア王女はひたすらに笑顔をおレンに見せている。

「……………まあ、なんだ。男なら覚悟を決めな、船長さん」

「う、裏切るのか!?!」

「いや、仲間でも何でもないだろ俺たち……」

オレンは脚に引つ付いたイアソンを鍛えた剛腕で引き剥がし、カウンターの裏から摘み出した。



今日知り合つた異国の船長。

コルキスの王女様。

どちらを取るか、オレンにとっては分かりきつていた答えだつた——

「——やつと出てきたな。イアソンの奴は居たの……か——」

「その声、アタランテか？ 何でお前まで来てんだよ……」

アタランテはメディアの弟、アプシユルトスを肩車して店の外で待つていた。

子供の弟に、酒場に入るのはまだ早いとメディアが言い出し、彼女に一旦預けたのだ。アプシユルトスもアタランテの事を気に入つたのか、特に抵抗はしなかつたし、アタランテもまた至福のひと時となつた。

——そうして酒場に入つたメディアを待つ事十分ほど。

メディアは何故か、樽を頭から被つた男——おそらくイアソン——の手を引いて

店から出てきたのだった。

「……浴びる程飲みたかったのか？ だとしても樽ごと頭からかぶるのは些かどうかと思うぞ」

「ちげえよ。むしろそっちの方が何倍もマシだわ……」

イアソンの酔いは完全に醒めていた。

というより、醒まされた。

「もう、タルソンさまったら。船で待つててくださいいって、私言いましたよね？」

「イアソンだ。その件に関してはオレは悪くない。お前は『いつ』来るのかは言ってなかった。だから来るなら『また』夜中にコソコソ来るだろうと判断したまでだ」

「まあ、アタランテさんに聞きましたよ？ 船長としての職務を放つたらかしてるって。本当は単純にお酒が飲みたくなって『ちよつとだけならいいだろう』とか浅はかな考えだったのでは？」

「だとしてもお前には関係ないな。具体的な時間を指定しない方が悪い。そして酒が飲みたくなつたのも、嫌な事を忘れようとしたのと、股間の痛みを和らげる為だ。つまり、殆どお前のせいだぞ王女様」

「あらあら、そうだったのですね。では今度こそ上手に事を運ぶ為に、やり直しましょうか。具体的に言うと、タルソンさまの記憶を零へと戻しましょう。まっさらです！」

「何を言ってるのかよく分からんが、やめてくれ」

——何だか二人だけの世界が広がっている。

ちなみに言い争いをしてる最中でも、メディアはイアソンの手を掴んだままだった。

イアソンも知り合ったばかりの相手にしては、遠慮なく本音をぶち撒けている。

「……汝ら、仲が良いのか？」

「そんな事ない（です）！」

アタランテの疑問に、メディアは顔を赤くして答えた。

イアソンは樽で顔が見えず分からないが、こもった声は微かに震えていた。

「……メディア姉さま？」

ここで今まで沈黙していたアプシユルトスが、アタランテの肩の上から姉の名を呼んだ。  
だ。

「あ、あら、どうしたのアプシユルトス？」

メディアはまだ赤みが引ききつていない顔で、弟に笑いかけた。

「——その変な人が、船長さんなのですか？ 僕、がっかりです……アタランテ様の方が適任なのではないですか？」

「……だそうだが？ イアソン。私と交代するか？」

「——見えないし誰だか知らんがいい度胸だなおい！」

——無事にイアソンを回収した一行は、アルゴ号の甲板へと戻った。

アプシユルトスは自由気ままにアルゴ号の船内探索に行つてしまつた為、この場には現在イアソンとメディア、それとアタランテの三人しかいない。

「——呪い、か………汝も災難だな。よりにもよつてこんな樽男を……」

「樽男言うな。それよりどう言う事だよおい。試練を有耶無耶にしてくれるつて話じゃなかつたのか？ つーかいいい加減この樽取つてくれ」

「だつてお父様、頑固なんですもの。メディアは精一杯説得しようと思つたよ？ あとそれはだめです」

「何でだよ！ オレの顔が見たくなきやお前が目隠しなり何なりすれば良いだろうが！」

「いえ、タルソンさま。私、貴方のお顔を見たくないとは思えないのです。呪いのせいだと思いますけど……でも、見たら見たで心臓が痛いほどキドキシちゃうんです——」

ほら、貴方のお顔を隠すしかないでしょう?」

「納得いかねー! くそ、息苦しいし蒸し蒸しするし何も見えん!」

イアソンは怒りに身を任せて、頭の樽を取ろうとする。

しかしメディアの魔術で固定された樽は、筋力なんかでどうにかなるものではなかった。

「——もう、仕方のない人ですね」

メディアは杖を一振り。

するとイアソンの頭の樽に変化が起きた。

「お? お、おおお!? 何かバキベキって変な音鳴ってるんだが!」

「あ、動かないでください。手元が狂うと頭ごと潰しちゃうんで」

「なに!? オレの頭今どうなってるの!? ヘラ——いやこの際アタランテでもいい!

た、たす、助けてくれ!」

「うむ、断る」

「なんで!」

イアソンがどれだけ抵抗しても、メディアの魔術は止まらない。

「——はい、終わりましたよ」

「何が? オレの命がか?」

「違いますよ……息苦しきは消えましたか？」

「……………言われてみればなんだか快適に——つーか見えるぞ。ははは何だこれ、覗き穴なんていつの間にあつたんだ？」

メデアはイアソンがかぶっている樽に細工をいくつか施した。

細工といつても簡単なものだ。

樽自体の大きさを彼の頭にぴったり合うように調整。

視界を確保できるくらいの覗き穴をちょうどイアソンの目線の位置に二つ。

空気の循環を良くし、程よい温度を保つ魔術。

ついでに防護の術式を仕込んだ程度だ。

——つまり、ちよつとやそつとの衝撃では壊れないどころか、傷一つ付かない快適なイアソン専用のかぶり物樽がここに誕生したのだ。

「ほーそいつは凄いな。これで安心して——じゃねーよ！ そうじゃないんだわ！ オレが言ってるのは機能性や利便性の問題じゃない！」

「それでお話の続きなんですけど——」

「無視!？」

メデアは杖をふりふりと揺り動かしながら語った。

「——試練には、アルゴノーツの方たちから助つ人を一人だけ連れてくる事を許可し

てくれましたよ」

メディアのその言葉に、騒いでいたイアソンは一瞬静かになった。

そしてすぐに再起動した彼は、込み上がってくる感情を抑えようとせず、心の赴くまま笑い出した。

「ハハハハハハ！ 何だよ、それを先に言え。全く、あれこれ色々と抜け道を探っていたが無意味になったな」

「? どうしてですか?」

メディアにはイアソンが大笑いする理由が分からなかった。

だが、アタランテには何か心当たりがあるのか、呆れたような生暖かい目で彼を見据えていた――

「どうして、だど? そんなの決まってる。このオレには、アルゴノーツにはあの『ヘラクレス』が――!」

「忘れたのか? 奴は今居ないぞ、馬鹿者め」

舞い上がっているイアソンに、アタランテは容赦なく残酷な真実を突きつけた。

「――ヘラ、クレスが………いるんだ。いるもん………うう――」

アタランテの言葉でイアソンは都合の良い幻想から辛い現実へとすぐに戻ってきた。ちなみにイアソンは本気で泣きかけてる。

「えっと……」

メディアは突然情緒不安定になったイアソンの姿に、かける言葉一つ思いつかなかった。

「気にするな、発作みたいなものだ」

ヘラクレス。

メディアにはそれが誰なのか分からなかったが、イアソンという男にとって重要な存在だということは理解できた。

「——その、また会えますよ。多分」

「……………」

樽をかぶった年上の男が、四つん這いで嗚咽を必死で堪えてる姿に、メディア流石に見ていられないと思い、慰めてあげたいという抑えている筈の感情が込み上がってきた。

メディアはイアソンの近くに寄り、しゃがみこんで優しくそう語りかけた——

「兎に角、貴方には試練を何としても突破してもらいたいです。メディアは応援しますよ♡」

今メディアに出来るのは、声援を送ることだけだった。

そんなメディアを、イアソンは顔を上げ、覗き穴の奥にある緑眼で力強く見つめる



……

「——あの、そんなに見つめられると困るんですけど……」

その視線に気付いたメディアは、顔を少しだけ赤くして、それから逃げるように視線だけを横にずらした。

その隙を狙っていたのか否か、イアソンは突然無防備になったメディアの両手を己の手で、逃がさないと言わんばかりにがっしりと掴んだ。

「え、あ、あの……？」

突然の不意打ちに、メディアの抑えていた感情が一気に迫り上がってきた。

思考が鈍り始めたメディアに、イアソンの手を振り解くという選択肢は浮かんでこず、ただひたすら、彼の温かい掌の温度にドキドキするしかなかった。

「——確認だが、メディア王女。貴女は私のアルゴノーツに加わりたい。それは間違いないですか？」

「え……ま、まあそういう事になるかと……」

アルゴノーツに乗り、彼と共にイオルコスを目指す。

メディアのその目的が、その行いが、彼のいう『アルゴノーツ』の一員になるという事なら、彼の言っている事は間違っていない。

「イアソン………汝、まさかとは思うが——」

「おお！ それでしたら『認めましょう』。今認めてしまいましょう。なに、私は必ず試練を乗り越える。ならば順番が多少前後しても何も……そう、何も問題はないな！」

「あ、あの……？」

「メディア女王——いや、『メディア』！ お前はもうオレのモノだ。そして記念すべき最初の船長命令だ！ オレと一緒に『試練に挑め』——！」

## 第7話

アイエテス王は激怒した。

確かに、試練に協力者を一人連れ添っても良い。

そう許可を出したのは他でもない彼自身だった。

だが——

「おお、アイエテス王よ。何故そのようなお顔をされるので？」

「貴様……！」

「まあまあ、お父様。彼の言う事にも一理ありますし、個人的に彼の申し出を断る理由がないのです」

「メデア……しかし私はお前の為を思ってたな——」

「おやおや、大事な愛娘の言葉を信じられぬのですかな？ おっと、彼女はもう『私の』アルゴノーツの一員でしたな！ はっはっはっ！」

——その協力者が、まさか自身の娘になるとは思いもしなかった。

しかも当の本人は嫌がるどころか、乗り気なのが余計にアイエテス王の心に火を付ける。

くわえてここぞとばかりに調子に乗ったイアソンは、仕返しとばかりにその火に油をぶっかけていく。

アイエテス王の血管は、はち切れる寸前だ——

「……………」

「お父様、気持ちには分かりますが抑えてください。殺すのはだめですよ」

「おやどうされましたかな？ 体調が悪いようでしたら休まれてはいかががっん!？」

「イアソンさまも、それくらいにしてくださいね♡」

メディアアは右手でアイエテス王の肩に優しく触れ、彼の激しい感情を宥める。

そして左手の杖を振りかざし、イアソンの股間を掌握、彼を黙らせた。

「——良からう、認めたくはないが、致し方なし。試練には二人で挑むがいい……だが、もし、万が一にでも——娘に怪我でもさせようものなら、その首を切り落として、竜の餌にしてくれよう」

「は、はん……望むところ——だ」

イアソンは股間の痛みに必死に耐え、膝をガクガクさせながら震えた声で啖呵をきつた——

——イアソン率いるアルゴノーツがコルキスに來訪した五日目の朝。

場所はコルキスの町から少し離れた平原。

ついにイアソンにとつて、人生を左右すると言つても過言ではない試練が、ひっそりと始まろうとしていた……

「——いや全然ひっそりじゃねえし。何この野次の多さ、オレは見せ物になるつもりはないぞ！」

確かに冒険譚として語るには、語り部の存在が必要になる。

だがこれは『多すぎる』。

試練の見届け役として、そしていざというときの為、アイエテス王とその側近たちが居るのは分かる。

え、イアソンが試練を受けるって？

船長死ぬんじゃないか？

でも面白そうだな、酒のつまみに丁度良さそうだから見にいこうぜ！

そんな感じでイアソンの勇姿（笑）を見届けに来たアルゴノーツの船員たちが居るのも、その理由は不本意だがまあ納得できる。

——だが、やけに興奮し歓声をあげるコルクスの民たちが居るのは理解できなかった。

おかげで観客の数はかなり多く、イアソンを円の中心として、大きな円形の壁が人によつて構成されている。

とどのつまり、いざという時の逃げ場が、無い。

イアソンはどうして……と頭を抱えた。

「——民の皆さんは、これを祭事だと思つてます。異国から来た戦士が、猛々しく、勇敢に闘う姿を求めています」

イアソンはその声に、顔をあげた。

気が付けばそこにはメディアがいた。

だが、そこに居たのは見慣れた彼女の姿ではなく、見たこともない神秘的な衣装を身に纏い、長い髪を後ろで一つにまとめたメディアの姿だった——

「……何だそれ、手袋か靴の左右間違えてないか？ 色合いが合っていないぞ。あと肩が寒そうだな」

「こ、これは女神ヘカテの巫女長としての正装です。こういうデザインなのですが——  
イアソンさまこそ、そんなピカピカの鎧どうされたのです?」

「船出する前に特注で作らせたものだ。今まで使う機会が無かったから、今回がこいつの初陣になるな!」

見栄えばかりを気にしたのか、急所をあまり守れていない鎧な気がする。

メディアは口には出さず、心でそう言った。

「……まあ、やる気があるのは良いことです。さあイアソンさま、こちらをかぶってください」

メディアは抱えていたイアソン専用の樽を差し出した。

それに気が付いていたものの、イアソンはあえて見えないフリをしていたが、やはりそれは無意味に終わった。

「——イヤだ。第一なんでもよりにもよって樽なんだよ。顔を隠すなら兜で充分だろうが」

「でもそんな意味のない羽飾りを付けたイアソンさまの兜より、こっちの方が色々トスゴいですよ!」

「意味ないとか言うなや——何がどう凄いだよ?」

「はい、時間があつたのでこの前調整したものを、私の工房で一晩かけてさらに調整しま

した。快適性は勿論、機能性もばっちりです。さらに頑丈性に加えて、身体機能の向上、感覚の強化といった術式も刻印してあるので、かぶるだけでちよつと強くなれますよ」  
「ふーん……ちよつと待ってる」

まだ数日の付き合いだが、イアソンはメディアがしようもない嘘を吐くような性格ではないのは既に理解していた。

加えて魔術の腕が良いというのも事実だろう。

あんな正確に、寸分違わず同じ場所股間を痛めつけられるのだから。

「おい『ポルクス』、ちよつとこれ強めに殴ってみてくれ」

イアソンはメディアから樽を受け取り、見物に来たアルゴノーツの集団へと近づき、その一員であるポルクスという名の女性にそう頼んだ。

「?」構いませんが……どうして樽を?」

「細かいことは気にするな。打ち込みの練習だと思え」

「おいイアソン、妹に変な事を頼むな」

「兄様、私は構いませんと言いましたよ?」

「……好きにするがいい」

——ポルクスの拳は鋭い鋸のようだ。

イアソンは、コルクスに到着する前に訪れたベブリュクス島で起きたある出来事を通



してそう思うようになった。

ポルクスはその島で暴君の名で恐れられていたある一人の男を、拳闘試合という形で己の拳だけで完膚なきまでにボコボコにした女だ。

ついでにその暴君の敵討ちだと襲ってきた連中もボコボコにしてた。

そんな彼女の拳を使い、イアソンはメデイアの言う事がどれだけ正しいのかを確かめる事にした。

「———ではいきます。そのまま放さないように」

「お、おう。言つとくが、本気では殴るなよ？　樽が壊れるくらいので良いからな。万が一お前の拳がオレの腹に突き刺さろうものなら、血の海を見る羽目になるぞ。オレの血でできたやつな」

イアソンは樽を胸の前に差し出し、衝撃で離さないようにがつしりと掴む。

そんなイアソンの声が聞こえているのか否か、ポルクスは軽く宙にジャブをして調子を確かめてから、改めてイアソンの方に向き直った。

———そして繰り出されるは雷のような一撃。

空を切り裂き、しなやかでどこまでも真つ直ぐな拳。

もう少し速ければ、音すらも置き去りにするのではないか。

そう錯覚してしまう程の強撃。

「……驚きました。実は岩石で作られてるのですか？ その樽」

「ポルクスの拳が通らないだと……？ 気味の悪い樽だな」

ポルクスは本気ではなかった。

とはいえ、エアソンの言う通り樽一つを粉々に粉碎するくらいには力を込めていた。

だが、樽は全くの『無傷』だった。

これにはエアソンだけでなく、ポルクスやその兄であるカストロも驚愕を隠せず이었다。

「……ほう、なるほど」

次の瞬間、エアソンは自らの兜を外し、雑に地面に放り投げた。

そしてエアソンは初めて、自分の意思で樽をかぶった——！

「……おお、確かに身体が軽い！ 力が湧いてくる！ はっはっはっはっはっ！」

仮に先程のポルクスの拳を、エアソンの兜に当てたとしよう。

当然、兜は無惨にひしゃげ、使い物にならなくなっていたであろう。

ポルクスの拳はそれ程までに恐ろしい武器だと、エアソンは知っている。

だからこそ、たとえ本気ではなかったにしろ、この樽が優秀な防具となるのは明白だった。

そしてイアソンは自分の生存確率が高くなるのなら、プライドを投げ捨てるのも厭わない男だった。

メディアア印の樽をかぶったイアソンは、己の肉体に普段よりも力が湧いてくるのを実感しつつ、ご機嫌な足取りで笑いながらメディアの元へと戻っていった……

「……どうしたのでしょうか、船長」

「ついに気でも狂ったのだろうか」

——まあ、事情を知らない者から見ると、イアソンは突然樽をかぶり笑いながらステップを刻む変人にしか見えないのだが……

「——なああれ、樽だよな？」

「何で樽を……?」

「きつとあれだろう。樽で視界を制限されても試練を乗り越えられるという余裕なんだろうさ」

「なるほど、さすが異国の英雄様だ。これは良いものが見られそうだ」

——そして若干おかしなテンションになっているイアソンに、民のそんな声は聞こえていなかったのであった……

## 第8話

——かくして、イアソンの試練が始まった。

異国の英雄達を引き連れた巨大な船の船長。

それに加えて、コルクスの王女であるメディアが試練に協力するのだ。

コルクスの民の興奮は、試練が始まってすぐに抑えきれぬほどのもになった——

「ひいひい!!? た、助けて……!!」

「タルソンさま頑張れ頑張れ♡」

「イアソンだし助けてって言ってるだろうがあああ!!?」

そしてイアソンもある意味、己の興奮を抑えきれずにいた。

命の危機に、全力疾走しながら感情の赴くまま叫んでいる。

そんなイアソンの真横を平行するかのよう、杖にお尻を乗せて空を飛んでいるメディアが声援を送っている。

「お、お前……!! オレの協力者だろうが! お得意の魔術でさっさと『アレ』の股間で

も握り潰して何とかしろ！」

「私、別に股間を握り潰す魔術しか使えないわけでは……それに、これはイアソンさまの試練ですよ？ 勿論お手伝いはしますが、私がゼーンぶやつちやつたら意味ないじゃないですか」

「限度がある！ 大体馬くらいのスピードで火を吐きながら迫ってくる牛とかおかしいだろ！」

……イアソンがなぜ必死に逃げ回っているのか。

その答えは、彼の背後にあった。

見た目は普通の雄牛と何ら変わらないそれは、コルキスの雄牛と呼ばれてる。

この雄牛は青銅の蹄を持ち、とても速い速度で走れる。

ちなみに結構凶暴だ。

そして口からは雄牛の怒りを体現したかのような、とても高温の火を吐く。

加えて、コルキスの兵たちに無理やり住処から連れてこられたうえに、最初にイアソンが調子に乗って背中に跨ろうとした為、物凄く気が立っている。

一言で言うると、とても危険な牛だ。

イアソンの第一の試練は、この雄牛を手懐け、土を耕すというものなのだが……

「あんなの無理に決まってる！ 手懐ける以前に近づいただけで丸焦げになるわ！」

イアソンの身体のあちこちには、既にいくつかの軽い火傷痕が。

ちなみにメディアア印の樽のお陰で顔だけは全くの無傷だ。

「ではどうしますか？ このまま逃げていても何も変わりませんよ？」

「そんな事は分かっているわ！ だからとつと何とかしろ！」

「あら、さつきも言いましたけど、あくまで私はお手伝いを——」

「んな事は百も承知だ！ どうせその『お手伝い』とやらの手段はとつとくに用意してあるんだろ!? オレが音をあげるのを待つてるくせに！ この性悪女！」

メディアアはバレてましたかと、小声で言ってから、乗り物代わりになっていた杖からお尻を離して、右手で握りなおした。

なお、空には浮かんだままだ。

「そーれ、 出番ですよ！」

メディアアが杖を振ると、彼女の足元に三つの『陣』が浮かび上がった。

その陣にメディアアは自身の魔力エッサを注ぎ込むと、それは起動した——

——ズルリ。

まるで深い穴の底から這い出るかのように、陣から現れた影は三つ。

それはまるで影の塊のようで、まるで腐った肉を引き摺る四足獣のようだった。

獣はイアソンと雄牛の間に割って入り、雄牛に向けて吠え出した。

すると爆走していた雄牛は、突然動きを止め、獣と睨み合った。

「ひいひい!? な、何だその気持ち悪いの!?!」

「気持ち悪くないです。この子達は冥府の猟犬。頑張つてバレないようこつそり躡けてたんですよ。カッコいいでしょう?」

「か、カッコいい……?」

イアソンは猟犬三匹を改めて観察した。

控えめに言つても、とても名状し難いというかしたくない悍ましい見た目をしてい  
る。

率直に言つて、恐怖しか感じない。

そして猟犬達はメディア主人の指示を待っているのか、低い唸り声をあげながら雄牛を警戒している……

——何はともあれ、これで『奥の手』を使う時間ができた。

「さあイアソンさま。奥の手は二つご用意しておきました。好きな方を選んでください  
ね♡」

メディアは右手の杖と、いつの間にか左手に手にしていた液体の入った瓶をイアソン  
に差し出した。

「私の魔術で痛みも何も感じなくするか、希少な薬草で調合した、『あら不思議、暫くの

間何者にも傷つけられぬ無敵になれる』お薬——どっちが良いですか？」  
どっちも何か嫌だ。

一方は人間としての何かを失いそうだし、もう一方は胡散臭い……  
とは言えないイアソンであった。

「……じゃあ、薬の方で」

「はい♡」

イアソンは少し悩んだ結果、胡散臭い方を選んだ。

——次の瞬間、メディアは瓶の中身をイアソンに向けてぶち撒けた。

「……何のつもりだ？」

全身が薬草の独特な匂いに包まれたイアソンはメディアにそう訊ねた。

「こつちの方が手っ取り早いので。本当は薬草を染み込ませた泉に沐浴するのが一番でしたけど……何せ貴重な薬草なもので、十分な量が確保できませんでした」

ですがこれでも大丈夫です。

メディアはそう言つて、腰の革の鞘から短剣を取り出した。

そして短剣を、えいっ。

イアソンの鎧の隙間から覗いている健康的な肌に『突き刺した』

「……………!?!? お、おまつ、お前何して——!」



「そんなに慌てないでください。ほら、刺し傷なんて無いでしょう?」

「——本当だ、血も出てないし痛くねえ。けど短剣の感触は確かに……」

「ですから言ったじゃないですか。『無敵』になれるって。勿論火も無効化できますよ」

「いや、にしても説明も無しにいきなり刺すか普通?」

「? 怪我はしてないし、させるつもりも無かったので別にいいかなーって。それに無敵になれるって最初に言ったじゃないですか」

「……………」

イアソンは何も言えなかった。

多分だが、このメデシアとかいう女。

物事が全部自分の中だけで『完結』してしまっている。

物事の過程はどうでも良く、結果良ければ全て良しみたいな考え方をしているのかもしれない。

——経験上、そんな奴に何を言っても無駄だとイアソンは理解していた。

(何でこんな奴をオレに惚れさせたんだよ……確かに有能かもしれないが)

イアソンは心の中で余計な事をしたであろう正体不明の神に向けて愚痴った。

いや、実はあの神なんじゃないかっていう予想は出来てはいるのだが。

「……………どうかしましたか?」

「——何でもねえよ。兎に角、これで火傷も怪我也気にせず突っ込んでこいつて事だろう?」

「はい! 頑張ってくださいね。大丈夫です、万が一があっても、死ななければいくらでも私が治して、直してあげますから!」

メディアは天真爛漫の笑顔でそう言った……

……薄々、薄々と気付いていたが、イアソンは確信した、してしまった。

(あ、こいつ何かヤバい女だな)

## 第9話

無敵の力（葉）を手にしたイアソンは、ガムシヤラに雄牛に向かつて突撃した。

雄牛の吐く炎も、鉄をも貫く突進も今のイアソンには何一つ効かなかつた。

最初は無敵といえど怖気付いていた彼だったが、やがて調子が乗り始めたのか、今では笑いながら雄牛の背に跨り、無理やり雄牛に括り付けた鋤を使って土を耕している。

——あの凶暴で家畜には向かないあの雄牛をあそこまで手懐ける事が出来るなんて！

このイアソンの勇姿を間近で見ているコルクスの民は大興奮した。

——あの火を吹くわけの分からない雄牛に、我らが船長が樽をかぶつて、跨つてはしゃいでるぞ！

このイアソンの勇姿（笑）を見守っていたアルゴノーツの船員たちは笑いを堪え切れず大爆笑していた。

色々な意味で盛り上がって来たイアソンの試練。

メディアは想定より早く事が運んでいる事に安堵しつつ、彼女は『次』をどうするか考えていた。

(次の試練は至極単純……やつぱり強化魔術をイアソンさまに——うーん、でも流石に数の暴力に逃げ出そうとしちゃうかも。そうなったらきつと……)

メディアはチラリと、アルゴノーツの船員達が集まっている場所を見た。

……やはり、全員『武装』をしている。

殆どが酒やつまみを片手に、イアソンの事を嘲笑って大爆笑しているが、逆を言えば全員がイアソンを『見ている』。

何があつても、すぐさま己の武器を手にてき、イアソンのもとへ駆け付けられる位置に居る。

(思ったよりも信頼、されてるのですね。船長としてのカリスマというやつでしょうか?)

だが、そうなのはお終いだ。

アルゴノーツが助けに入れば、お父様は試練を中止し、秘宝を渡す事を断固拒否するだろう。

故に、次の試練はいかにイアソンをその気にさせるかが肝心だった——

「ふはははは！ 見たか、この見事な土地を！ きつと良い作物が育つに違いない」

「ええ、ひとまずお疲れ様です。それにしても思っていたよりも手慣れているようでしたね。牛鋤のご経験があるのですか？」

「ああ、昔『馬小屋』でな。一生使わない技術だろうと忘れ掛けていたが、意外な所で役に立ったな」

「はあ——馬小屋で牛鋤ですか……？」

イアソンの活躍によって、見事耕された土地。

危険な雄牛にはさつさと野生に帰ってもらい、一仕事を終えたイアソンの顔は晴れ晴れとして上機嫌だった。

「はっはっは、良いぞメディア。最初はどうなるかと思つたが、お前の魔術も薬もそれなりに役に立った。この後も期待してるぞ」

イアソンは疲労と達成感がいい感じに混ざつて、一種の興奮状態、すなわちハイテンションになっていた。

それ故に、紛れもない本心を口にして、彼は無意識に右手を動かした――

「……………え」

そう、メディアの頭の上に向けて。

「はっはっはっー！」

そしてイアソンはメディアの頭の上に自らの手を乗せた。

さらに小動物を愛でるかのように、軽くポンポンとリズムカルに叩いたり、撫で始めたではないか。

「……………うあ……………」

そしてメディアの全身の体温は急上昇。

思考が乱されていく…………

あれ、愛しの人に触られてる？

嬉しい、嬉しい。

いや落ち着くのよメディア。

女の頭を、髪を無造作に扱う男なんて論外だつて叔母さまが言つてあ意外と手が大きいのですねイアソンさま——

「……あの」

メディアは羽虫のように小さな声を絞り出した。

それでもイアソンの耳には届いていたのか、彼は一旦手を止め、メディアの様子を伺つた。

「や、やめて……ください」

メディアは羞恥と喜びが入り混じつた感情で、イアソンにそう訴えた。彼女の顔は夕焼けのように真っ赤だった。

「——お、おう。悪かった……」

その言葉とメディアの様子で、イアソンは正気に戻つた。

彼なりの謝罪の言葉を口にして、慌ててメディアの頭から手を離れた。

「……」

「……」

しばしの沈黙。

何とも言えない空気。

「——あの」

それを破ったのは、そこそこの大きさの皮袋を手にしたコルクスの兵士だった。「例の品をお届けに参りましたが……その、お邪魔でしたか？」

「い、いえ！　ありがとうございます！　引き続き警護の方、お願いしますね！」  
メデアアは誤魔化すように、兵士から皮袋を引つた。

「——こほん。さあイアソンさま、次の試練です。心の準備はよろしいですか？」

「お、おう」

二つ目の試練。

それは土から生まれしスパルトイを全て倒すというもの。

実に単純明快で、実に英雄の武勇伝に相応しい内容だ。

「ではこちらをどうぞ。耕した土に適当にばら撒いてください」

メデアアは皮袋をイアソンに渡す。

「……何だこれ。動物の骨か？」

イアソンは中身を確かめるべく、受け取った皮袋に手を突っ込み、その中から尖った骨のような物体を一つ取り出した。

「そもそも何だが、スパルトイって何だ？　聞いたことないんだが」

「あら、ご存知ないのですね。まあ私も詳しくは知りませんが……お父様の話によると、竜の牙から誕生した兵士だそうです」



その昔、カドモスという男がいた。

彼はとある理由で軍神アレスの所有する泉の水を得る為に、部下に水を汲ませに行つたが、泉を守る竜に部下は全員殺されてしまった。

それに怒つたカドモスは泉の竜を殺し、その竜の牙を大地に撒くと、骨の身体を持つ兵士が生まれた。

そしてその中で特に優秀な兵士をカドモスは新たな部下に迎え入れたらしい……

——その時の竜の牙の一部が、巡りに巡つてコルキスに流れ着き、アイエテスの手に渡つたのだ。

「そうですね……分かりやすく言い換えるなら『竜牙兵』といったところでしうか」

「り、竜の牙から生まれた兵士だつて……？ おいおい、それつて結構ヤバイやつなんじゃ……」

「大丈夫ですよ。所詮は使い魔みたいなものです。そんなに強くはないですよ——一匹がイアソンさま二人分くらい強いですかね」

「それももうオレ負けてるじゃねえか！ あ、でも今のオレには無敵の力が——」

「あ、そろそろ効果が切れる頃ですよ」

「本当に一時的かよちくしょうめが！」

……そもそも、最後の試練ではその竜の寝床に乗り込む事になっているのだが……

こんな所で弱気になつてもらつては困つてしまう。

「大丈夫ですよイアソンさま。今回もちゃーんと、秘策を用意していますから」  
メディアはさあさあと、イアソンを急かす。

それに果てしない不安を感じながらも、イアソンは言われた通り竜の牙を自分が耕した土地にばら撒いていく……

すると竜の牙は吸い込まれるように大地に沈んでいった。

——程なくして、骨の身体を持つ竜牙兵が地面から湧き始めたではないか。

「うわ、何か気持ち悪いな。わきやわきやしてるぞ」

「そうですか？ 私のカッコいいと思えますけど……」

「お前の感性がズレてるのはもう分かったから黙つててくれ」

それと同時にメディアは観客席を遮断するように、球状の防護結界を展開させた。実は雄牛の時もしていたのだが、これで観客たちに被害が行くことはなくなった。

「——よし、準備できました。さあ、思う存分暴れてくださいイアソンさま！」

「はっはっは、その前に一つ聞いて良いか？」

「はい、何でしょうか？」

「オレがさつき地面にばら撒いた骨、どれくらいあつた？」

「えーっと……確か20個ですね」

「もう一つ良いか？ あの竜牙兵とやら、どう見ても20匹以上居るように見えるんだが？」

「はい、正確には56匹ですね。頑張ってください」

「おかしくない？ 明らかに2倍以上に増えてるじゃねえか！」

「？ ……ああ、別に牙1つにつき1匹生まれるわけではありませんよ。むしろ増殖しますよアレは」

「ふざけんな理不尽だろ！ つまりオレの強さを持った気持ち悪いのが112匹分居るってことじゃないか！ 勝てるかこんなん！ 助けてヘラクレス！」

「……どうして隣に私が居るのに、ヘラクレスさんとやらに助けを求めますか——」

メディアの胸の奥にチクリとした棘のような感触。

掴めない雲のようなモヤモヤとした感覚。

この正体不明の感情をメディアが自覚するのは、もう少し先だった——

## 第10話

「はいイアソンさま。今回の秘策です」

メディアは右手に握った物体を、イアソンに差し出した。

「ほう、今回は随分とあっさり助けてくれるんだな」

「ええ、思ったより時間が押してしまっているのです。予定ではあの薬のみで二つ目の試験を突破して貰いたかったのですが——」

「悪かったな予定通りにならなくて——それで、『これは』何だ？」

イアソンはメディアから受け取った物体を一目したあと、すぐにそう問いた。

「はい、見ての通り『小石』です」

「それは見れば分かる。これをどう使うんだと聞いているんだ。投げると爆発するとか  
?」

一見するとそこら辺に落ちていそうな小石だが、魔術師メディアが一度は手にした小石だ。

きつと何かあるに違いない。

イアソンはそう思い、メディアの答えを待った……

「いえ？ ただの小石ですよ。さつきそこで拾いました、なんの変哲もない小細工もしていない小石です」

「そうかそうか、ただの小石か——馬鹿にしてるのかお前」

「とんでもありませんイアソンさま。とつても貴方さまにお似合いの武器かと——クスツ」

「今絶対笑つたらろお前」

「いいえ、笑つてませんよタルソンさま（笑）」

「……………」

イアソンはメディアの態度に苛立ちを感じるが、ここで変に反発してもまた股間を握り潰されるだけだと確信していた。

ハッキリと口に出しては絶対に言わないが、イアソンはメディアに『勝てない』のだ。

他の英雄達に比べると確かに劣った部分が目立つイアソンではあるが、それでもケイローンの弟子だった。

もしメディアと剣を振るう事になったとしたら、当然彼の方が勝つし、力勝負になつても彼の方が有利になるだろう。

だが、魔術師であるメディアには勝てない。

魔術に関しては殆ど知らないイアソンでも、ここ数日で彼女の魔術師としての脅威は充分に理解していた。

(やっぱりさっきのが不味かったか？ 何か急に機嫌悪くなつたというか、態度が少し……)

故にメディアを怒らせてはいけない。

じゃないとこのサイコっぽい少女が何をするか予測できない。

だからイアソンは彼なりにではあるが、極力メディアを刺激しないようにしていたのだが……

さっきの行いをしてからというもの、彼女の気に障ってしまったのか、何処か刺々しい態度を取られてしまっている。

そして心なしか、こめかみ辺りの血管が膨張して青筋を立てているようにも見える。

(不味いな、ここでこいつの機嫌を損ねる訳には……)

イアソンは必死にこの窮地を脱するべく、頭を回転させる——

(……何で私、あんな事で怒ってるの?)

一方メディアは、己の内側から迫り上がってくる怒りの感情に困惑していた。彼と逢い、恋の呪いに蝕まれてからずっとこんな調子で参ってしまった。

理解が出来ていない筈の感情に振り回されるといのは、思いの外精神的なダメージが大きいものだ。

メディアはもうすっかり慣れてしまった感情を抑える魔術を掛け直し、改めて気を取り直した。

「——兎に角、私を信じてくださいまし。その小石を竜牙兵の群れに向けて思いつきり投げてください。出来るだけ中心にです」

メディアは生まれたてほやほやで、まだ呆けて動かない竜牙兵の集団に指をさして言った。

イアソンはメディアの機嫌をこれ以上損ねないようにと、文句の一つも言わずに言われた通りに小石を放り投げた……

放物線を描き、小石はやがて竜牙兵の集団の中へと吸い込まれるように消えていった。

するとどうだろうか、今まで大人しくしていた竜牙兵たちが、突然暴れるかのように動き出した。

「さあ今ですイアソンさま！ 突っ込んで思う存分斬ってください！」

「はあ!! 今すぐ!! あの餌に群がる魚のように暴れ出したキモい骨の化け物の群れにか!?!」

「むしろ今しかないんです! ー(ー)ー(ー)です!」

「!? あ、足が勝手に……!」

肝心な場面で怖気つくイアソンに痺れを切らしたメデアは、彼に二つの魔術を掛けた。

一つは支配の魔術。

そしてもう一つは、音を消す『消音』の魔術を……

「くそつたれ……!」

イアソンは涙目になりつつも、剣を抜刀。

ヤケクソ混じりに振り回し、叩き付ける勢いで竜牙兵たちに剣を振るった。

——というより、足は完全に言う事を効かないので、イアソンは無我夢中で剣を振るうことしかできないのだが。

……竜牙兵は思いの外脆いのか、イアソンの振るう剣でもアツサリとその骨の体を砕くことができた。

(……? おかしい、反撃が来ないぞ。というより、何でこいつら『仲間割れ』してんだ?)



身体を動かしつつ、イアソンは疑問を感じた。

話を聞く限りこの竜牙兵はただの木偶人形ではないはずだ。

竜の牙から生まれ出でた、骨の戦士達。

ならば『戦える』筈だ。

だというのに、その剣の腕はイアソンに振り下ろされることなく、むしろ近くの同胞に手当たり次第に攻撃している。

(何だか知らんが確かにチャンスだ！ オレは同士討ちに夢中なコイツらの隙だらけな背中に剣を振れば良いだけなんだからな……！)

—— 竜牙兵は使い魔のようなものと、メデイアは言った。

その表現は決定的外れではなく、むしろ核心を突いている。

竜の牙から生まれし骨の戦士。

その正体は、正真正銘ただの『使い魔』だ。

魔力を帯びやすい竜の素材を媒介に、大地の魔力と結び付くことで体を形成する使い

魔。

そして使い魔というものは、『使役者』がいて初めて役に立つものだ。

「うーん……やっぱり命令系統が無いと人形と何も変わりませんね」

メデアアはその瞳で、イアソンの勇姿（笑）を見届けながらそう呟いた。

メデアアは既に、過去に竜牙兵を使った実験を何回かしていた為、その特性は誰よりも理解していた。

あの竜牙兵は使役者が居ないと、その辺を歩き回ったり、『音がした方に攻撃する』という一定の行動しか取らないのだ。

——何が言いたいかというのと、あの竜牙兵たちは弱い、イアソン一人でも倒せてしまいうくらいに。

むろん、使役すればある程度の命令をそつなくこなせ、連携も取れるのでそれなりに強くなるし、全く使い道がないというわけではないのだが……

「……ですが、傍目には骨の怪物の群れの中で無双する英雄が一人——これで文句はありませんよね、お父様♡」

——第二の試練がもう間も無く、幕を下ろそうとしていた。

## 第11話

—— イアソンは二つ目の試練を突破した。

「ハハハハハハ！ 見たか、オレの剣捌きを！」

イアソンは物言わぬ骨の残骸の山の上で、剣を掲げ最高に調子に乗っていた。

そんなイアソンの背中を、メディアは宙に浮きながら二、三回指でつつついてこう言った。

「おめでとうございますイアソンさま。実に、素晴らしかったですよ」

つつつかれたイアソンは、後ろに振り向いた。

「おう、正直何がなんだか分からなかったが、お前が小細工でもしたんだろう？ よくやったな」

イアソンは本日何度目かの上機嫌だった。

故に素の笑顔を、偽りなくメディアに向けてそう言った。

(むう……認めたくはないけど素敵な笑顔ですね。元の素材が良いとこんなにも——  
ああ、もう。思考が引つ張られる)

恋の呪いについて、少しだけ理解できた事がある。

どうやら最初に犯されるのは、『思考』だという事だ。

人間にとつての一番の武器とも言える知恵、そして考える力。

その源である思考という概念を誘導——いや、引力のように引つ張ってくるのだ。

そうして思考が麻痺し、混在した瞬間、身も心も犯していくのだ。

本人に気付かれることなく、獲物を狙った蛇のようにこつそりと……

「——はい、お褒めの言葉、素直に受け取っておきますね。イアソンさま」

つまりメディアは、思考を完全に引つ張られてしまったらもう手遅れだと考えている。

なので、彼女がこの呪いに負けないようにするには、絶対に思考を『止めてはいけない』という事だ。

「……それでは、時間も押しているので参りましょうか」

「あ？ どこにだ？」

「もう、お忘れですか？ イアソンさまの最後の試練——『竜の寝床』に、ですよ♡」

「帰りたいたい」

「ダメです。もう、何でそんなに弱気なのですか？」

「だって、無理じゃん竜とか。五秒で死ぬ未来しか視えない」

何故か異常なまでに嫌がるイアソンを、メデイアは無理矢理（魔術で）引っ張る事数十分。

二人はコルキスの秘宝を納めている杜へ赴いた。

此処はコルキスの竜の住処でもあり、秘宝の宝物殿でもあるのだ。

「だ、大体何で竜が国の宝なんか守ってるんだよ。あれか、手懐けてるのか？」

「いいえ、イアソンさま。竜を手懐けるのは人間の身では不可能です。可能性としては、竜と『契約』を結ぶとかもありますけど……まあ今は関係ないでしょう」

メデイアは手にした杖の下の尖ってる部分で、地面に絵を描き始めた。

「——コルキスの竜は、この国が出来る以前よりこの地に住み着いていたそうです」

「……お前、絵下手だな。それ竜のつもりか？ 太い蛇にしか見えん」

「……………」

「何だよ、無言で杖をコツチに向けるな！ 悪かった、悪かったからその『じゃあ頭を弄つて竜に見えるようにしましょう』みたいな顔しないで！」

「——では何故我々は共存しているのか。それは、コルキスの竜は良くも悪くも人間に『無関心』だったからです」

メデアは気を取り直して、説明を続けた。

「彼は自身に害が無ければ、人間が来ようが国を作ろうが全くの不干渉を貫いたそうです」

「…………じゃあ何で宝の番人みたいな真似事やってるんだよ、その竜」

イアソンには疑問があった。

人間に無関心なら、人間の持つ秘宝を守る意味があるのだろうか、と……

「いいえ、正確に言えば、彼は秘宝を守ってなんかいません」

「は？」

「もつと簡単に言いましたよ——要は、彼の住処に、私たちが勝手に秘宝を納めているだけなのです」

「……………え、何で？」

イアソンは納得しきれずに、疑問を口からこぼした。

「ほら、そうすれば『竜の住処に宝があるから、竜は宝の番人なんだ』——つて、勝手に勘違いしてくれるでしょう?」

——メディアの言葉にイアソンは言葉を失った。

「……お前、仮にも国の秘宝だろ。そんな雑な扱いで良いのかよ」

「そう決めたのはお父様なので、私に言われても……それに、裏を返せばこれはイアソンさまにとつて得なんですよ?」

「はあ? 何処が得なんだよ?」

「だって、竜はただ『そこに居る』だけですから。たとえ金羊毛皮をイアソンさまが持ち出しても、彼は絶対に何もしてきま——」

「よーし俄然としてやる気が出てきた。何をグズグズしてる、とつとと行くぞメディア!」

「——せんが、彼は三度の食事より睡眠が好きでな竜。寝ているところを物音を立てて起こしてしまうと、彼の逆鱗に触れますのでご注意ください……あら、行ってしまいました」

——とある竜は、生まれながらにして完成されていた。

特に使命がある訳でもなく、ただ一つの生命体として、生きる上で十分に完成された存在。

何事にも興味はなく、何をするでもなく、何かを成すわけでもない。

……退屈ではない、と言えば嘘になるかもしれない。

だがその退屈も不快なものではなく、竜はただそれを素直に受け止めていた。

だから、人が住処の近くにやって来た時も、文明を築き始めた時も、竜は特に何もしなかった。

寝床を壊そうとしたり、自分の生活の邪魔にさえならなければ、竜は人間という生き物に眼を向ける事さえしなかった。

——竜は人間に興味なんて無かった。

『——あの、初めまして。私、メディアと申します』

興味なんて、無かった。

今も無い。

だが、初めてそれを意識したのは、間違いないあの人間の来訪だった……



「——おお、これが竜か。実物は初めて見るが、想像していたよりも小さいな」

……やけに耳障りな雑音で、目が覚めた。

「初めましてだな小さき竜よ。オレはイアソン、コルキスの秘宝である金羊毛皮を取り  
にきた英雄だ。さあ、秘宝は何処にあるんだ？」

——イアソンはこの時、昂っていた。

無理だと思っていた試練を二つも乗り越え、いよいよ最後の試練。

しかも秘宝を取ってくるだけというシンプルな試練。

イアソンにとって、自分の将来を、王になる為に必要な物があと少しで手に入るとい  
う状況。

メディアアの先程の言葉もあり、竜への恐怖心は既にその辺に放り投げた彼は、最高に  
調子に乗っていた……

——当然、そんな事情など知る由もしない竜にとって、イアソンは己の睡眠を邪魔した愚者と認識した。

威嚇といわんばかりに、竜はその大きな口を開き、猛々しい咆哮をした。

「あひゅ」

竜の咆哮をモロに喰らったイアソンは、泡を吹いて気絶。

産まれたての子鹿のように、脚を激しく震わせながら、情けなく地面に倒れた。

「」

静かになった愚者を、竜は二度と此処に来ないように、騒がれないように『潰す事』にした。

人間が目の前を鬱陶しく飛ぶ羽虫を叩き落として潰すように、竜もまた鬱陶しい人間を潰すのだ。

——その大きな尻尾を持ち上げ、そのまま重力に身を任せて、愚者目掛けて振り下ろす。

まるで巨大な鞭のように……

「——待ってください」

巨大な鞭が、イアソンを潰す寸前でピタリと止まった。

「その方を潰されては、困ってしまいます」

竜は視線を前に戻す。

そこには——ああ、あの人間が居た。

別に好きでも嫌いでもない、ほんの少しだけ興味があるだけの、人間が。

『■■■■……お前のモノか、思慮する者、賢人よ』

竜は人の言葉を発した。

そこに人間のような感情は何も乗せられていないが、竜が人間と意思疎通をする事自体がとても珍しい事だった。

「……あの、前から言ってるんですけど、その呼び方はちよつと……私にはメディアっていう名前が——」

『何が違う？ 何も変わらない、支配する女よ。お前のその名にはその意が込められている』

「あなたは竜なのでしょ？ どうして人の名前の意味なんか分かるのです？」

『言の葉は嘘を吐かない、嘘の意を持たせるのは浅ましい人間の業だけ。たとえ人間や神が生み出した言の葉であろうと、それは変わらない』

「……竜種ならではの感性なのですかね？ 私にはちよつと難しい話です」  
メディアはそう言いながら、手にした杖を一振り。

すると地面に倒れていたイアソンの身体が浮き、ふわふわと雲のようにメディアの方へ移動していった。

「んー、見事に気絶してますねイアソンさま。後でちゃんと、気付けしてあげますから、今はそのまま寝ていてください」

『■■■■……二度と、その愚者を近寄らせるな。次はお前の声でも、止めぬ』

「ええ、ご安心を。このお方がここに来るのは、これで最後ですから……」

そう、これで最後。

彼は秘宝を持つて、この場から立ち去る。

そして故郷で玉座に座り、偉そうに高笑いするだけの人生になるのだろう。

だから、彼がコルクスに来るのはこれで最後――

「……………」

チクリとした、現実味のない痛み。

イアソンが二度とコルクスには来ない。

そして自身は秘宝を返してもらい、この国に帰るだけ……

彼は永遠にここには来ない。



それを愚かと言わずして何とする……何故その愚者に肩入れする？ 先程お前が声を発しなければ、お前は呪縛から解放されていた筈だ』

竜はメディアアに掛けられた呪いを看破したのか、随分と深く抉ってくる。

人間に興味なんかないというわりには、かなりお喋りな竜だ。

「其方こそ、私の身を案じてくれるのですか？ いつもよりお喋りさんですね」

『■■■■……物事には必然がある。支配する者は支配を、支配される側は従順に——だのに、お前は呪縛に支配されている。支配する側のお前が、あろうことかつまらない呪いに縛られている……嗚呼、今のお前を見ているだけで鱗が剥がれ落ちそうだ』

要は、見てもらえない……みたいな感情なのかもしれない。

「……確かに、そうですね。でも、これは私の問題です。私は絶対に人は『傷付けたくない』のです」

——メディアアの歪な心の奥には、たった一つの願い、もしくは誓いがある。

それは……

『どうか、誰も傷付かない世界でありますように』

——ああ、勿論世界平和を求めているわけではない。

『正義』を求めているわけでもない。

争いは起こるべくして起こってしまうものだ。

根本を正すのは、不可能に近い。

私が願うのは、何があっても傷が付かないような世界。

たとえ傷が付いても、そんなの最初から『無かった事』にする世界。

全てが『復帰』し、ゼロへと戻る世界。

その過程にどんなに傷付こうが、どんな事があるうが、最終的に全て『元に戻れば良い』。

そうすれば、何があっても結果的に傷は残らない。

誰も悲しまない、誰も嘆かない。

私のような『存在』も、きっと生まれなくなる……

「……だから私は、このお方を殺さない。殺したら『戻せない』。後戻りできなくなる——

——私は、最後にこのコルキスに戻りたいだけです」

『……………』

竜は未だに、眼にメデイアを移したまま暫く静止する。

『■■■■……成る程、それもまたお前の『一部』か……全てを回帰させる。実に良い言葉だ』

竜はそう言つて、一步下り、元の定位置へと寝そべつた。

『■■■■……もう行け、我は眠る。『いつもの』を我に掛けよ』

「……はい、『いつもの』ですね♡」

メデイアは杖を一振り。

その杖に乗せた魔術は、眠りの魔術。

竜すらも眠らず、メデイアの魔術。

竜はあつという間に、眠りに落ちた。

それはもう、心地良さそうに。

「……今更なんですけど、私にだけこうしてお話ししてくれるのって、私の魔術目当てだったりするんでしょうか？ まあ、どうでも良いんですけど」

——こうして、イアソンの試練は幕を閉じたのであった。



## 第12話

「……本当に行ってしまうのですか？ メディアア姉さま」

「ええ……大丈夫よアプシユルトス。私は必ず戻って来るから」

コルクスの港。

既に出港の準備が出来ていて、いつでも出立できるアルゴー船。

かの船が未だに停泊しているのは、一人の少女の乗船を待っていたからだ。

「……まだかよ」

「そんなに急ぐのなら、あの娘など置いて行けば良い」

アルゴー船の甲板で、上から見下ろす形で、姉弟の美しいハグを細い目で睨み付け、苛つきを隠せないイアソン。

その隣で、カストロクという男がイアソンにそう言った。

「——そうしたいのは山々だ……だが、コルクスの秘宝、あいつが持ってんだよ……」

イアソンが血反吐を吐く思いで手に入れたコルクスの秘宝。  
イアソンが王になる為に必要な証。

金羊毛皮は現在メデイアが持っている。

『別にイオルコスに着いてからお渡ししても問題ありませんよね？ ええ、持ち逃げされたり、何処かの島で用済みになった私を置き去りにされても困りますから、私が持つてますね♡』

イアソンの脳裏には、イアソンの考えなどお見通しと言わんばかりの表情をして、金羊毛皮を抱えたメデイアの姿。

当然、コツソリと奪い取ろうとしたら、イアソンの股間が悲鳴を上げた為断念した。

「——本当にあの娘を乗せる気か？」

「仕方ないだろうが！ あのおつかない女なんて、本当は乗せたくねえよ！ けど乗せなかったら乗せなかったらで、今度こそオレの股間が無惨に消し飛ぶんだよ！」

「股間……？ ——まあ、船長はお前だ。お前が良いと言うのなら、船員の俺たちは従うまでだ」

「何だよ、最後まで反対しないのかよ」

「……気の毒だとは思う。あの娘も、お前も——故にこれはほんの少しの同情心だ」

カストロ口はそう言って、その場から立ち去る。

多分、妹のポルクスの元に向かったのだろう。

「……くそつ、結果的に見れば上手くいつてるはずなのに、どうもムシャクシャする」  
イアソンは無造作に自分の髪をクシャクシャにする。

……そう、本来であればコルクスの秘宝を最悪奪い取ろうとしていたのだから、この状況は大局的に見れば大成功と言える。

無駄な血は流れず、犠牲も無い。

喜ぶべき事なのだろう。

しかしイアソンはどうにも納得が出来ていなかった。

「そもそもイオルコスを出発してから、『上手く行き過ぎてる』……いや、ヘラクレスが途中で居なくなってる時点で上手くはいってない気はするが……」

そう、まるで誰かが予め用意した道を歩かされていくような、そんな気分。

仮にそれが本当だったとしたら、その道を用意しているのは間違いなく——

「——はんつ、今更考えても意味ないし無駄だな。オレの目的が達成に近付いてるのは事実……使える物があれば全部使ってやるさ」

理由や動機など、イアソンにとってはどうでも良い事柄だ。

最後に、自分が玉座に座る事さえ出来れば、他の事なんてどうでも……

「——すいません、お待たせしました」

「おうっ!？」

さつきまで真下にいた筈のメディアが、いつの間にか背後にいた。

「お、おう、全然待つてないぞ。オレも今来たところだ」

「……? 言つてる事おかしいですよ、イアソンさま」

ビックリして変な返しをしてしまったイアソン。

とりあえずさつきの独り言が聞かれてない事を祈りつつ、メディアの方を改めて見る

……

すると、ほんのり彼女の目元が赤く腫れているのに気が付いてしまった。

(チツ……泣くくらいなら無理して付いてこようとすんなよ)

故郷がそんなにも恋しいなら、ずっとそこにいれば良いだろうに……

『……気の毒だとは思う。あの娘も、お前も——故にこれはほんの少しの同情心だ』

——ふと、先程のカストロの言葉がイアソンの脳裏をよぎった。

(同情心……考えてみれば、見知らぬ男に理由もなく惚れちまうのって相当キツイよな?)

仮にイアソンが、彼女の立場だとしたらどうだ。

好きでも無い相手に、恋をしてしまう。

自分のものではないナニかが、頭の中を埋め尽くす……

それは多分、吐き気を催す『恐怖』だ。

(……心底オレじゃなくて良かったわ。もしオレがこいつに惚れる呪い受けてたらと思うと……いや、それ以上考えるのは止めておこう)

正直言つて、自分も被害者のようなものだ。

好きでも無い女に惚れられ、樽を被せられたり股間を締め付けられたり薬をぶっかけられたり無茶振りさせられたり。

だから、イアソンがメディアを気に掛ける必要は何処にもない筈だ。

……しかし、まあ、ほんのちよつとだけ『同情』はする。

(逆に考えろ、一応こいつもアルゴノーツの一員となった。なら、船員のメンタルを気に掛けてやるのも船長としての務め……)

ほんの少し、ほんの少しだけ特別に慰めてやろう。

イアソンにしては珍しくそんな考えが頭をよぎった。

——そしてこれは彼なりの自論ではあるが、女を慰めるときは男の体温を感じさせると良い。

軽く、本当に軽く。

触れるか触れないかのギリギリのラインで、ハグの一つでもしてやろうじゃないか。

そう思ったイアソンは、メディアの方に手を伸ばし……

「あ、私の前ではこれ被っててくださいいね♡」

……頭に何処からともなく飛来した、イアソン専用の、色々と魔術で魔改造された樽によって、彼の手は途中で止まってしまった。

「……………なあ、一つ聞いていいか？」

「はい？ 何でしょうか？」

可愛らしく首を傾げるメディア。

そんな彼女にイアソンは色々と押し寄せて来る感情を何とか押さえながら、口を動かした……

「——お前さ、本当にオレの事好きなの？」

メディアはポカンとした表情で数秒だけ固まる。

そしてすぐに、いつもの可愛らしく、悪戯っ子のような天真爛漫な笑顔で、こう答えた——

「はい！ 愛してますよ（笑）、タルソンさま！」  
「——イアソンだ！」

## 第二章 海の怪物と島の魔女

### 第13話

——どこで間違えたのだろうか。

——何が正解だったのだろうか。

そんな意味のない問答を繰り返して、繰り返して、最後に結論が出ることはなかった。

「……………」

もはや涙も枯れ果てた。

喉も焼き切れ、血も流し切った。

ここに残っているのは、死に損ないの自分。

「」

掠れた声で、言葉にすらなっていない単語を呟く。

誰の耳にも、自分の耳にすら届かないというのに。



だが、そうするしかなかった。

何もかも失い、何もかも捨て、何もかもを捨てられた自分には、そうするしかなかった。

——それは自分のささやかで、もはや叶う事はなくなった、たった一つの願願い事い。もはや届かなくなったそれを、彼方の海原の向こうに夢見て祈る。

祭壇に捧げる供物のように、差し出す生贄のように。

祈りながら、前へと進む——

——かくして、ついに念願のコルクスの秘宝を手に入れたイアソン。

コルクスを出発し、イオルコスへと続く帰路についたアルゴー船は順調に航海を続け

ていた。

天気は快晴、波も穏やか。

風の動きも悪くない。

何なら甲板に出て、大きく深呼吸すればさぞ気持ちが良いだろう。

今日は特に、絶好の航海日和だった……

(……………クソツ、何でこんな事に！)

——にも関わらず、アルゴ―船の船長であるイアソンは、船の倉庫の隅に隠れるように、膝を抱えて座りながら震えていた。

(——あ、足音！ 間違いない、アイツだ！)

小刻みに震えるイアソンの耳に、コツコツと規則正しい音が聴こえてくる。

木材の床と、靴の底が互いに衝突する事で発生する音だ。

それがどンドン、『近付いて来ている』。

イアソンは右手で口元と鼻を覆い、いつもより激しい呼吸音を隠して息を殺す。

余った左手で、震える体を慰めるかのように己の右肩を強く握る。

ひたすらに近付いてくる足音が、此方に来ないよう祈りながら……

(……………？ 何だ、足音が急に消えたぞ)

さつきまで少し離れた位置から——正確には、締め切った倉庫の扉の向こうから聞こえていた足音が、急に途絶えた。

——少し様子を見るくらいなら。

イアソンは恐怖を振り払おうと、なけなしの勇気で、震える膝でその場から少しだけ立ち上がる。

そして音のしていた、倉庫の扉の方を一目見ようと、木箱の隙間から視線を通す——

「——イアソンさま♡」

「ヒィ……!」

木箱の隙間の向こう側。

イアソンがしていたように、向こう側からも覗く者がいた。

青と紫を混ぜたような、宝石のような瞳がイアソンを覗いていた。

イアソンは思わず、情け無い悲鳴を漏らしつつ、その場から後退りをする。

しかし狭い倉庫だ。

すぐに部屋の壁の感触が、背中に伝わってきた。

「——どうして、逃げるのですか？」

ソレは木箱の上を、幽鬼のように飛んで飛び越える。

そしてイアソンの眼前に立ち塞がり、ニコニコとした笑顔でイアソンにそう問い掛けた。

——その右手には、歪な刀身をした短剣を持つて。

「や、めろ。来るな、頼むからこっちに来るんじゃない！」

「そんなに怯えないでください。大丈夫、痛みはありませんよ」

「そういう問題じゃねえよ！ ひい……！ せ、船長命令だ『メディア』！ メディアさ

ん！ いやメディア様！」

イアソンの必死の叫びに、メディアと呼ばれた少女は特に反応を示さず、手にした短剣を振りかざしながら近付いてくる。

その際、笑みを浮かべ続けているため、側から見てもイアソン当事者から見ても非常に不気味だった。

「——さあ、これであなたも『仲良し』です。イアソンさま……えいつ」

可愛らしい掛け声で、イアソン目掛けて短剣を振り下ろすメディア。

時間にして一瞬だったが、イアソンにとつてはその全てがゆつくりと感じた。  
(何で……こんなことになっちまったんだっけ?)

イアソンは最後に、事の経緯を走馬灯のように感じ始めた。  
そう、あれは今日の朝の出来事から始まった……

——コルキスを出発してはや数日。

今のところ順調に海路を進むアルゴ船。

思わぬ新人がアルゴノーツに加わったが、思いの外船員達からは大きな反発は無く、  
彼女は少しづつ新しい環境に馴染んでいった……

「……驚きました。まさかドドナのオークをこの船でお目に掛かるなんて——」  
「何だ、何か驚くようなことなのか？」

「神聖な樹木、囁く木霊——神託を告げるドドナのオーク……まさか船の木材にしてるなんて——」

「……もしかしてマズかったか？ オレも船の建造には立ち合ったが、良い木材だとか聞かされてなかったんだが」

「いいえ？ マズい事なんて一つもありません。むしろ逆です、上手くいけば神託を貰えて、私の呪いを解けるかもしれませんから」

神託ってお前、その呪いも神の力によるものじゃなかったつけ？

そう思い、口にしかけた言葉をイアソンはグツと喉の奥へと押し込んだ。

こいつの言葉に余計な事を口に出すと、ろくな事にならないと、彼は学習していたからだ。

「——それより、何か不満はあるかメディア？ 慣れない航海だろう、十数年も自国に籠ってた田舎王女には結構堪えるんじゃないか？」

そしてイアソンは、話をはぐらかすかのように、話題を変えた。

「うーん……そうですね」

メディアは唇に右手の人差し指を当て、暫く考え込む。

「……強いていうのなら、『工房』が欲しいです」

「工房？ なに、実は鍛冶が趣味だったりするのお前？」

「いえ、確かに小物作りとかは結構好きですけど……そうじゃなくて、私の言う工房は、魔術師にとつての工房です」

メデイアは海の景色を眺めながら、話を続ける。

「イアソンさまが無駄に広い船長室を持つているように、アルゴノーツの戦士達が精神を研ぎ澄ます為の訓練室があるように。誰にだって心安らく自身の領域、陣地というものがありますよね？ 当然、魔術師にだってそういうのが必要なわけなのです」

「ふーん、魔術師の工房ね……つーか、お前の部屋は用意してやったじゃないか」  
「自室と工房は同義ではないです」

「よく分からんな、そして残念だがアルゴノーツ船にもう余分なスペースはない。悪いが諦めてくれ」

余分なスペースはないというのは、本当だ。

しかしそれ以上に、イアソンは魔術師という人種に、自身の船に何かされるのを嫌っているのだ。

工房だか何だか知らないが、妙な場所を船の中に造られるのには抵抗感があつただ。だ。

「ですが、結構大きめな部屋が一つ余っていたような……」

「バカ、あれはヘラクレスの部屋だ！ いつアイツが戻ってきてきても良いようにそのまま

にしてるだけだ！」

——またハラクレスさんの話してる。

メディアはモヤモヤした得体の知れない感情を抑えながら、何とか平静さを保とうとする。

「……まあ、無理は言いません。有ったら色々と便利というだけで、必須ではありませんから——それより、イアソンさま」

「あん？」

「私が差し上げた『樽』。ちゃんと被つてください」

「はっはっは、イヤだ」

——そう、イアソンは例の樽を今は身につけていない。

メディアの呪いの効力を少しでも薄くする為の処置。

それに加えて、メディアの魔術によつてそこらの適当な金属で鍛えられた兜よりも硬く、身体能力も向上する優れたもの。

単純に顔を隠すのはイヤだというイアソンの為に、メディアがあれこれ工夫したというのに、イアソンはここ数日それを部屋の間この置き物にしていた。

「大体、そんなにオレの顔を見るのがイヤなら、オレに近付かなければ良い。そもそも、呪いの所為つていう割にはここ数日オレにベツタリじゃないかお前」



「——私だって顔立ちだけ無駄に整ってるイアソンさまにベツタリしたいわけじゃないです」

「おい、今無駄にって言ったか？」

イアソンの問い詰めるような声をメディアは無視して続ける。

「……何と言いますか。確かにイアソンさまとは距離を置いた方が良いのかもしれませんが。呪いが強まらないとは言いい切れませんし——ですが、貴方の側にいないとそれはそれで、不安で押しつぶされそうになるといいますか……」

独りでいると、人間は思考を加速させる生き物だ。

それが孤独を紛らわす為のものかどうかは知らないが、兎に角イアソンから距離を置くと余計に彼の事を考えてしまい、結果として呪いの進行が強まるのは既に身を以て思いい知らされている。

しかし、だからといってずっとイアソンの側にいても呪いが進行してしまうだろう。

「なので私なりに考えた結果、『適度な距離』を保つ事にしました」

「適度な距離？」

離れ過ぎてても、近づき過ぎてても駄目。

それなら、どちらも満たす方法で、完全には『満たされなければ良い』。

「側にはいるけど、私は決して貴方の顔を視界には入れません。それでようやく呪いの

バランス、つまり帳尻が合わせられます」

「ふーん、成る程な……」

イアソンは納得した。

確かに彼女はこのアルゴ―船に乗船してから、イアソンの顔に視線を向ける事は無かった。

「……いや、でもそれならそれで良くないか？ お前がそっぽ向いてれば済む話だし、オレが樽を被る必要は——」

「もう、イアソンさまったら。貴方に拒否権なんて無いですよ♡」

「はっはっは、可愛い声でおっかない事言いやがってこんちくしょう」

コルキスでの出来事と、ここ数日の船旅でイアソンはメディアという女がいかに『狂ってる』かを理解し始めていた。

一見すると、騷の行き渡っている箱入り娘のような雰囲気だが、その正体は——

”オオオオオオオ——！！”

——突如響く不協和音。

というより、船を揺らす怒号だった。

「ぴゃつ……!?!」

「あー……『また』か——あれお前今凄いい間抜けな声出さなかつた?」

その怒号の正体も、心当たりもイアソンにはあつた。

しかしアルゴノーツとして日が浅いメディアにとつては、初体験でもあり、臓器までも揺らす大きな音に驚いてしまい、思わずその場で屈んで両手を頭の上に乗せ震え出してしまった。

そんなメディアの姿は、人間としての防衛本能が働いた結果だろう。

だがイアソンにとつては、恐ろしい魔術の数々を扱うメディアにも、少女のような臆病な一面があつたんだなという半面、その姿が滑稽にも感じた。

「なあ、今『ぴゃつ』つて」

「い、言つてません!」

故にイジる。

ここぞぞと言うばかりにイジる。

「凄いな、咄嗟でもそんな悲鳴を出すやつなんて中々いないぞ」

「ツ~~~~!」

メディアは顔を真っ赤にさせ、ぎゅつと杖の持ち手を握り込んで羞恥に耐えた。

確かに、変な声が出てしまったのは事実だ。

だが、今までの人生で彼女のそんな可愛らしい失態を突つつこうとする者は居なかった。

故にどう対応したら良いか、咄嗟に思い付かなかったメデイアは、羞恥心が無くなるまで顔を俯かせる事しかできなかった。

(え、何で何もやり返さないんだこいつ……)

一方イアソンは、拍子抜けを喰らっていた。

こんな機会はありませんと、カウンセラー覚悟でイジるような発言をしたのだが、当の本人は一瞬で顔を真っ赤に染めて、それを隠すように下を向いてしまった。

「……………」

「……………」

互いにこの先を予想していなかった故の、気まずい沈黙。

永遠に続くのではないかと錯覚するこの沈黙を破ってくれたのは、慌てた様子で甲板の向こうから走って来たアルゴノーツの船員の一人だった。

「——船長！ またパーノスとスタピュロスが喧嘩をおつ始めて、收拾がつかなく……？」

「そ、そんなわけない！（ありません！）」

## 第14話

アルゴー船は大きい。

当然だ、数多の英雄たちを乗せる船なのだから。

出来るだけ個室も用意してあるし、船旅に付き纏うストレスを解消する施設も船内に幾つかある。

——ここで一つおさらいしておこう。

船旅において、最も避けなければならないトラブルは何か？

航路のミス、船の破損、座礁——挙げればいくらでも挙げられるが、その中で最優先で避けなければならないことがある……

それは、船員同士のトラブルだ。

長い船旅には、ストレスが付き物。

同じ環境に、長い時間浸るのは、英雄といえど精神的苦痛が伴う。

だからアルゴー船は、イアソンは、可能な限り船員のストレスを除いていた。

逃げ場のない海の上で、船内で暴動なんか起きてみる。

真つ先に死ぬぞ、オレが。

それがイアソンの心の内だった。

——しかし、どんなにイアソンが頑張っても、『爆発』してしまう時はしてしまう。

特に、喧嘩っぱやくて、仲のあまりよろしくない連中が、偶々同じ卓になった時が最悪だ。

「まあたお前らか！ やめろやめろ！ 殴り合いくらいなら許すが、武器を抜くな！」

「船長は引つ込んでろ！ このバカには拳より鋼を喰らわすのが一番なんだよ！」

「何だところのクソ兄貴！」

——前回の喧嘩からひと月ほど。

この兄弟の英雄にしては、もった方だ。

よく喧嘩する二人として、船内では有名なパーノスとスタピュロスという兄弟。どうやらまた、些細な言い争いからヒートアップして、お互い武器を抜くまでに至ってしまったらしい。

「やつと帰るだけになったというのに、コイツらは……！ ブーテース！ 力自慢の連中何人か連れてこい！ それと船医もな！ それと周りで見てる奴らは、賭けてないでいざとなったら止めろよ！ 絶対だぞ！」

イアソンは他の船員たちに指示を出していく。

ちなみに自分が間に入って止めるという選択肢は最初から存在していない。

「——何の騒ぎなんですか？」

とそこへ、少し遅れてやって来たメディア。

「見たまんま、喧嘩だよ喧嘩。巻き込まれたくないなら、お前は船内に引っ込んで——」  
「まあ！ それは良くありませんね。喧嘩なんてしても損ばかりです。みんな仲良しさんにならないとっ！」

「お、おう……っ？」

喧嘩という言葉聞いた瞬間、メディアの態度が一変した。

さつきまでビクビクしていた子犬が、突如牙を剥いて襲い掛かるように。

何か使命感を得た英雄のように。

メディアの瞳には闘志が燃えていた。

——ここで補足すると、メディアは争い事は基本的に嫌い……というより、苦手だ。当事者になるのも、傍観者であろうと、モヤモヤした何かを感じてしまうから。

それは既に忘れ掛け、心の奥底にある記憶の片隅。

まだ自我の安定していなかった自分のせいで、愛する家族が一度バラバラになりかけた事例があったからなのかもしれない。

喧嘩なんてしなれば良いのに。

常日頃からそう思っていたメディアは、ある日ふと閃いた。

——喧嘩の原因を無くせば良いのではないだろうか……と。

「その方達！ 喧嘩はダメですよ！ えーい！」

「あうち?!」

「あ、兄貴!?!」

メディアはトテトと走り、喧嘩をしていた無防備な兄の背中に、どこから取り出したのか、短剣を『突き刺した』。

その光景に、周りにいた船員たちに動揺が走る。



「お、お前！ 兄貴になにしや——う、動けねえ!？」

「あなたも仲良しさんです♡」

そして突然のメディアの奇行に、面食らっていた弟の方に、動きを止める魔術を掛けてから、その腹部にも短剣を突き刺した。

ドサリと倒れる大の男が二人。

その中心には、ニコニコの満面の笑みで佇むメディア。

イアソンだけでなく、周りにいた船員が混乱する。

メディアの奇行に、理解が追いついていなかったからだ。

「お、おま……!？」

何してんの!？」

とイアソンが叫ぶ前に、喧嘩をしていて突然現れた王女に刺された兄弟が、何事も無かったかのように起き上がった。

「——オレたち、ズットナカヨシ」

「アア、オトウトヨ。ズットナカヨシダ」

そして虚な目をした二人は、ぎこちなく肩を組み、ぎこちなく言った。

((何か変だ!))

その場にいた誰もが、同じ事を思った。

「あら? ちょっと洗脳が強過ぎちゃいましたかね?」

((今、洗脳って言った!))

ここまで来れば、殆どが察する。

この可憐な王女様が、あの兄弟をおかしくしたと。

「——でも、これで解決ですね! あ、折角なら『皆さん』にもやっておきましょうか。ストレスや不満を抱えてる方がいるのなら、また喧嘩になつてしまいますからね」

メディアが辺りを見回す。

短剣を握りながら。

まるで次の獲物を探す狩人のように。

——ここでイアソンを含めた全員は、身の危険を感じた。

修羅場を潜ってきた英雄たちとはいえ、危険を感じる本能はある。

とはいえ、本来なら魔術師とはいえ、成人もしていない小娘に恐れを抱く事はない。だが、彼らは確かに感じていた。

得体の知れない恐怖というものを。

殺気を全く発する事なく、むしろ善意に似た何かで、短剣を突き刺す凶行ができるこのメデアに。

それに相手は小国とはいえ、王女だ。

下手に抵抗して逆に怪我でもさせたら、色々と面倒なのは間違いない。

故に彼等が選んだ行動は、皆同じだった。

「あ、皆さん！ イアソンさまもどうして逃げるのですか!?!」

蜘蛛の子散らすように、逃げた。

ある者はひたすら船内を走り続け、ある者は部屋に籠る、隠れる。

「……仕方ありません。一人ずつ探して、仲良しさんにしないと!」

メデアは決意した。

アルゴノーツ全員を仲良しさんにする事に……

後にこの出来事を通して、メデアは船員たちから『仲良しの魔女』と呼ばれるようになったとか、ならないとか――

「ふう、流石に疲れました」

イアソンを無事に『仲良し』したメデイアは、魔術の影響で気絶したイアソンを見下ろしながら一息ついた。

「何で皆さん逃げるんでしょうか……叔母さまも言っていました、短剣を媒介に魔術を起動させるのは止めた方が良いのかしら——でも効率的だし、痛みも怪我もさせないのだから別に良いと思うのですけど……」

ビジュアル的にアウトだよ！

もしここにメデイアの叔母が居たら、そう突っ込んでいてくれてたかもしれない。

「……流石、歴戦の英雄たちですね。魔力が結構持つてくれました。早いところ補充しないと——」

——ふいに、メデイアの視界にイアソンの顔が目に入った。

あいも変わらず、顔だけは整っている。

「……唾液交換による魔力補充。微々たるものですけれど……贅沢は言っていられませんし」

海の上を征く船。

魔力の補充は限られてしまう。

今この場でできるのは、目の前にいるイアソンからの魔力摂取。

唾液、血液、精液など、体液から摂取するのが一番だろう。

その中でさらに手っ取り早いのは、唾液からの魔力摂取。

……一言で表すと、接吻だ。

「……………」

メディアは床に膝をつき、倒れているイアソンの顔へ、自分の顔を近づける。

垂れ下がる自分の髪の毛を、左手で押さえながら――

「……………っ!?!」

――直前でメディアは我に返った。

疲労による判断力の低下、恋の呪い、その他諸々――

色々と重なって、メディアは自分から恐ろしい事をしようとしていた。

「……………あとで、アタランテさんからもらいますよ」

そうしてメディアは、顔を真っ赤にしてその場を去っていった。  
残されたのは、哀れにも白目を向いて気絶しているイアソンだけだった……